

白い肌のアジア人

——レンヴァルト・ツイザートの『日本誌』（一五八六年）を読む——

踊 共二

目次

はじめに

一、ツイザートの経歴と『日本誌』執筆の背景

二、日本の国土、習俗、政治形態

三、白い肌のアジア人

四、日本の迷信と偶像礼拝

五、東西のカトリック改革

おわりに

はじめに

ヨーロッパ世界で初めて日本を紹介した文献は、周知のようにマルコ・ポーロ (Marco Polo, 1254-1324) の『東方見聞録』である。この一三世紀末の書物に描かれた「チパンク Chipangu」(またはジパンク Zhipangu) の姿は次のようなものであった。この国は大陸から一五〇〇マイル東に位置する大きな島であり、独立の王国をなしている。ここでは随所に黄金が見つかり、人々は「誰でも莫大な黄金を有している」。「国王の一大宮殿は、それこそ純金づくめ」である。またこの国は「ばら色をした円い大型の、とても美しい真珠」を大量に産する。この「富める島国」の住民は「色が白く礼節の正しい」人々である。しかし彼らは、牛・豚・犬・羊などの顔をした偶像を拜んでおり、その生活ぶりは「キリスト教徒にとつては耳にするだけで重い罪劫になりうる」ような「荒唐無稽」と「悪魔の術」の連続である。しかも「彼らは人肉がどの肉にもましてうまいと考え」、捕虜を殺して食べる「野蛮人」である。⁽¹⁾

マルコ・ポーロはもちろん日本の地を踏んだことはなかった。現実に日本に住み、つぶさに観察してヨーロッパ人に詳細な日本情報を与えたのは、一六世紀以降のイエズス会宣教師とイベリア半島の商人、冒険者たちであった。彼らは無数の報告書や著作を残した。おかげで一六世紀後半以降、日本人を「食人種」と考えるヨーロッパ人はいなくなる。しかしながら、「おぞましい偶像崇拜に染まった野蛮人」のイメージは、「礼節をわきまえた肌の白い人々」のイメージとともに長く残りつづけた。ここで確認しておきたいのは、マルコ・ポーロの記述に、二つの日本観ないしアジア観が整合性を欠いたまま並列されていたことである。⁽²⁾

一六世紀以降のヨーロッパ人が記した日本情報・日本論は、わが国のキリシタン史・南蛮文化史・日欧交流史の研究者们によって数多く邦訳されており、主要なものほとんど日本語で読むことができる。近世日本および近世ヨ

ヨーロッパの政治・社会・宗教・文化についても多彩な研究が行われている。しかし交流史の枠組みのなかで関心を集めているのは、当然のことながら、交流相手として重要であったスペイン、ポルトガル、オランダ、イギリスなどであり、近世ヨーロッパの「内陸世界」とくにドイツ語圏に注目する研究者は少ない。この状況が多少変わるのには、出島のオランダ人との関わりのなかでドイツ人が登場する時代以降である。それも一七世紀末に来日して元禄時代の日本の姿を克明に伝えたエンゲルベルト・ケンペル (Engelbert Kemper, 1651-1716) の存在があつてこそである。⁽³⁾

一六世紀半ば、日本人はまだヨーロッパのドイツ語圏のことを何も知らなかった。一方、フランシスコ・ザビエル (Francisco de Javier, 1506-1552) の来日間もない時期から、日本情報はドイツ語圏の人々にも伝えられていた。当時のイエズス会士の日本通信はラテン語、スペイン語、ポルトガル語などで書かれていたが、遅くとも一五七〇年代以降にはドイツ語の翻訳本や紹介文が本格的に出版されるようになっていた。一五八五年にはドイツ語圏を含むヨーロッパ各地で「天正遣欧使節」に関する報告書や単発新聞が印刷され、日本ブームが沸き起こった。一五八六年にアウクスブルクで発行された『新聞／日本島便り Neue Zeitung/ aus der Insel Japonien』は、日本のキリシタン大名の特使として到来した少年使節について、「四人の方々はみな非常に聡明であり、思慮深く、尋常ならざる博識の持ち主である Alle vier aber von Natur/...gar Sinnreiche/ hochverstendige/ vnd vber die mass wolkundige Leutl」と絶賛し、彼らがローマ教皇グレゴリオ一三世に謁見したこと、その後ナポリ、ヴェネチア、ミラーノなどを歴訪したことなどを報道している。その紙面には似顔絵が掲載されており、凛々しい洋装の美少年たちの姿が描かれている。⁽⁴⁾ こうした日本情報は、一六世紀後半のドイツの善男善女に鮮烈な印象を与えたに違いない。しかしこの種の記事は短く、情報量は少なかった。

ヨーロッパのドイツ語圏で初めて、翻訳に終始せず独自の観点で詳細な日本情報・日本文化史を書いたのは、スイ

ス、ルツェルンの市民レンヴァルト・ツイザート (Renwart Cysat, 1545-1614) である。その書物のタイトルは『真実の報告／新発見の日本の島々および諸王国について／その他のこれまで未知であったインドの諸地方について』(フリブール、一五八六年)であるが、本稿では簡略に『日本誌』と呼ぶことにする。⁽⁵⁾『日本誌』の本編は、イエズス会士の書簡・報告類から得られた情報を著者自身の理解と価値判断に従って論述する形式で書かれている。参考資料としては、天正遣欧使節に関する公式記録やイエズス会年報などの翻訳(ツイザートによるドイツ語訳)が収録されている。この書物は本編一〇七ページ、地名集一三ページ、広域日本地図一枚、翻訳資料三九三ページに及ぶ大著であり、事実の誤認もかなり含まれてはいるが、当時ヨーロッパで得られる日本情報を網羅していた。⁽⁶⁾

本稿は、この書物の内容を詳しく紹介し、その記述内容を同時代のイベリア半島出身の海外宣教師たちの記録と照らし合わせながら、ヨーロッパ人の日本観の原像を探り、かつ、当時のドイツ語圏ヨーロッパの住人たちに遠く離れた日本の地理や習俗、宗教や政治体制に関する情報を提供することによってどのような意味があったのかを明らかにする試みである。

一、ツイザートの経歴と『日本誌』執筆の背景

ツイザートはアジアを旅したことはなく、日本の状況を自分で見てきたわけではない。しかし彼の経歴を知れば、なぜこれほどまでに心血を注いで本書を書き上げたかは容易に理解できる。レンヴァルト・ツイザートは一五四五年にスイスのカトリック邦ルツェルンに生まれた。彼の一族はミラーノからの移民である。この一族がルツェルン市民権を得たのは一五四九年のことであった。父親の代まで家名はイタリア式のチェザーティ (Cesati) であった。レンヴァルトは長男であったが、少年の頃に父を失い、家計の苦しさゆえに教育の機会には恵まれなかった。しかし彼は、

薬劑師として働きながら独学でラテン語を覚え、歴史や自然誌の研究に没頭した。後世レンヴァルトはスイス民俗学の父と呼ばれることになる。彼は多くの言語を修得し、イタリア語はもちろんフランス語にも堪能であった。一五七〇年、レンヴァルトは二五歳でルツェルン市の下級書記官 (Unterschreiber) に起用される。一五七三年には拡大市参事会に入り、その二年後には市書記官 (Stadtschreiber) の地位に就いた。彼はその後四〇年にわたってルツェルンの内政・外交全般に関わる実務を担うことになる。書記官は官房を指揮する要職である。彼はまた外交使節として外国の君公や政治家と渡りあう経験も豊富に積むことになる。一五九七年には騎士に叙せられ、名実ともにルツェルンの門閥の仲間入りを果した。ツイザルトは在任中、当時おざなりであった公文書の整理を体系的に進め、官庁用語を高地ドイツ語 (標準ドイツ語) によつて統一し、同時代の出来事を自ら年代記に書きとめた。また古今の歴史資料や自然誌関係の資料の収集に力を注ぎ、スイスの紋章図鑑、自然誌、民俗誌を編み、聖人ニコラウス・フォン・フリーエ (修士クラウス Bruder Klaus/ Nikolaus von Flüe, 1417-1487) の伝記も書いた。また彼は自分の地所に植物園を開いた。⁽⁷⁾

ツイザルトの博識と観察眼、整理能力と計画性は『日本誌』においてもいかに発揮されている。しかしそれだけでは不十分だ。『日本誌』はツイザルトが終生抱きつづけたカトリック信仰と改革精神の発露でもあった。ツイザルトはプロテスタント宗教改革によつて混乱に陥つたヨーロッパのカトリック世界の再生を願う篤信の政治家であり、トリレント公会議 (一五四五―一五六三年) の改革理念を信奉し、外交面ではスペイン、サヴォア、教皇庁を最重要視していた。やがてツイザルトの宗教的情熱は、それまでフランスを後ろ盾としてきた市長ルートヴィヒ・プフィーファー (Ludwig Pfyfer, 1524-94) を動かして政策を転換させ、ルツェルンを反宗教改革 (カトリック改革) の一大中心地に仕立てることになる。ルツェルンへのイエズス会の招致および神学院 (Kolleg) の設立もツイザルトの尽力

に多くを負っている。⁽⁸⁾

一五七四年、イエズス会の新しい拠点をルツェルンに築くために上ドイツ管区（アウクスブルク）からやって来たのは、マルティン・ロイベンシュタイン（Martin Leubenstein, 1533-1596）というパーテルであった。彼はポルトガルのコインブラで研鑽を積んだ人物であり、アジアに渡った宣教師たちと親しかった。ロイベンシュタイン自身もアジア伝道に派遣される可能性があったが、最終的には任命されなかった。ツイザートは一五七五年から八八年まで、このロイベンシュタインが指導するルツェルンのイエズス会神学院の管財人（経理担当）を務めた。⁽⁹⁾ 実務のかたわらツイザートは、イエズス会の海外伝道に強い関心を覚え、ラテン世界から日本に渡ったイエズス会宣教師たちの現地報告や紹介記を渉猟し、ついに一五八六年に『日本誌』を上梓したのである。この本は残念なことに現在では「忘れられた名著」に属する。しかしドイツの日欧交流史家ペーター・カピッツァは、ヨーロッパ世界の日本像に関する浩瀚な書誌研究（一九九〇年）において、この書物にも相応の歴史的価値を認めている。スイスの研究者たちは『日本誌』についての本格的な研究を行ってはいないが、たとえばヨハネス・ベックマンはツイザートの日本情報・日本地図の印刷史上の意義に論及し、トーマス・インモース、ハンス・ブライテンシュタイン、マルティン・ヒューリマンなども早くからこの書物を日瑞交流史の記述の冒頭に掲げ、その記述の精密さを指摘してきた。⁽¹⁰⁾

一六世紀後半、ドイツ語圏の辺境に位置するアルプス世界において、アジアの島国はそもそもいかなる意図でどのように紹介されたのであろう。以下まず『日本誌』の構成を知るために目次を掲げておく。番号および記号は筆者が付したものである。

序文

- (一) 日本島とその位置について
 - (二) 日本の住民の衣服の形態と食生活について
 - (三) 日本の統治と政治秩序について
 - (四) 異教の聖職者／僧侶身分／日本人の迷信と偽りの礼拝について
 - (五) 日本人の異教的な祈りと信心について
 - (六) 日本の異教の坊主の説法について
 - (七) 日本の特別で枢要な寺院／その他の施設について
- 日本語による地名集／島の名／王国／領国／地方／都市／莊園／集落と城
付録／これまで一度も印刷されたことのない広域日本地図
結語／日本の歴史をわれわれはどのように用いるべきか

〔付録の翻訳資料〕

- A 一五八二年にイエズス会の司祭ガスバル・コエリヨ師がローマのイエズス会総長宛てに書いた最重要の書簡
- B 一五八五年に日本の国主たちの使節が／ローマを訪れ／そこで彼らのカトリック信仰を公に告白した次第。豊後の国主フランシスコ「大友宗麟」の書状／有馬の国主プロタジオ「有馬晴信」の書状／大村の大公バルトロメウ「大村純忠」の書状
- C 教皇グレゴリオ一三世聖下の御前で／日本の使節同席のもと／イエズス会の司祭ガスバル・ゴンサルヴェスが
行った演説。教皇聖下がアントニウス・ブカラダリウスに代読させた答辞

D ある日本語文書の抜粹／この国独特の文字を付す

E オリエントのインドにおける／イエズス会の四名の司祭、一名の修道士／および他の数名の俗人たちの殉教について／一五八三年の記録

F 別の殉教事件について／司祭イグナティウス・アゼベティウスと彼の同伴者たち／総勢四〇名が海上でカルヴァン派によつて惨殺されたこと／一五七一年ペドロ・ディアス記

G 大洋の向こう側のブラジルにおけるキリスト教の拡大について／イエズス会の司祭キリティウス・カーザが管区長に宛てた一五七五年の書簡

正誤表

次に『日本誌』序文の内容を検討しておこう。この長い序文は、ルツェルン市長プフィーファーへの献呈の辞として書かれている。まず驚嘆と感謝の念をもつて語られているのは、誉れ高いイエズス会が四〇年このかた遠く離れたインド、ペルー、日本、ブラジルその他でさまざまな成果をあげ、「忌まわしい悪魔崇拜 *verehrung des leydigen Satans*」と「偶像礼拝 *Abgöttereyen*」から人々を引き離して正しいキリスト教信仰に導いてきたこと、またヨーロッパにおいても短期間で何千何万の魂を獲得し、キリストのもとに立ち返らせたことである。イエズス会はヨーロッパ各地で「棄教者たちの回心 *bekehrung der Abgefallenen*」、「多くの面で弛緩してしまつたキリスト教的規律とキリスト教的生活の回復と改善 *widerbringung und erbesserung mäncherley manglen Christlicher Zucht vnd Lebens*」⁽¹⁾「あらゆる無秩序と悪徳の排除 *abschaffung allerley Vnordnung und Lasteren*」そして「立派な学校の建設」を手がけた。次にツイガートは、三年もの歳月をかけて旅をしてきた遣欧使節に言及し、この使節に関するイタリア語の資

料について説明している。この資料には使節が日本を旅立つ前に書かれた日本情報（二五八二年）も含まれていた。⁽¹²⁾ この記録に目を通したツイザートは、それを何としても「われわれのドイツ語 unsere deutsche Sprach」に翻訳してルツェルンの人々と共有したいと思うほど深い「慰め [Trost] を受け、かつ「清涼感と面白や Erquickung und Belustigung」を味わったという。日本の歴史および日本におけるキリスト教会の成長の物語は、ツイザートの確信によれば、「魂の救いと隣人の教化に役立ち zu der Seelen Heyl und auferbauung der Nächsten dienlich」、それによつてますます神の御名が讃えられる素材になりうるものであった。『日本誌』はヨーロッパ人の「教化」「建徳」の目的で書かれたのである。⁽¹³⁾ 執筆の意図はとりあえず明白であろう。このあとツイザートは、本書の構成と参考文献の短い説明を行い、ルツェルン当局の重鎮や市民仲間、イエズス会およびその神学院で切磋琢磨する学生たちへの謝辞をつづっている。⁽¹⁴⁾

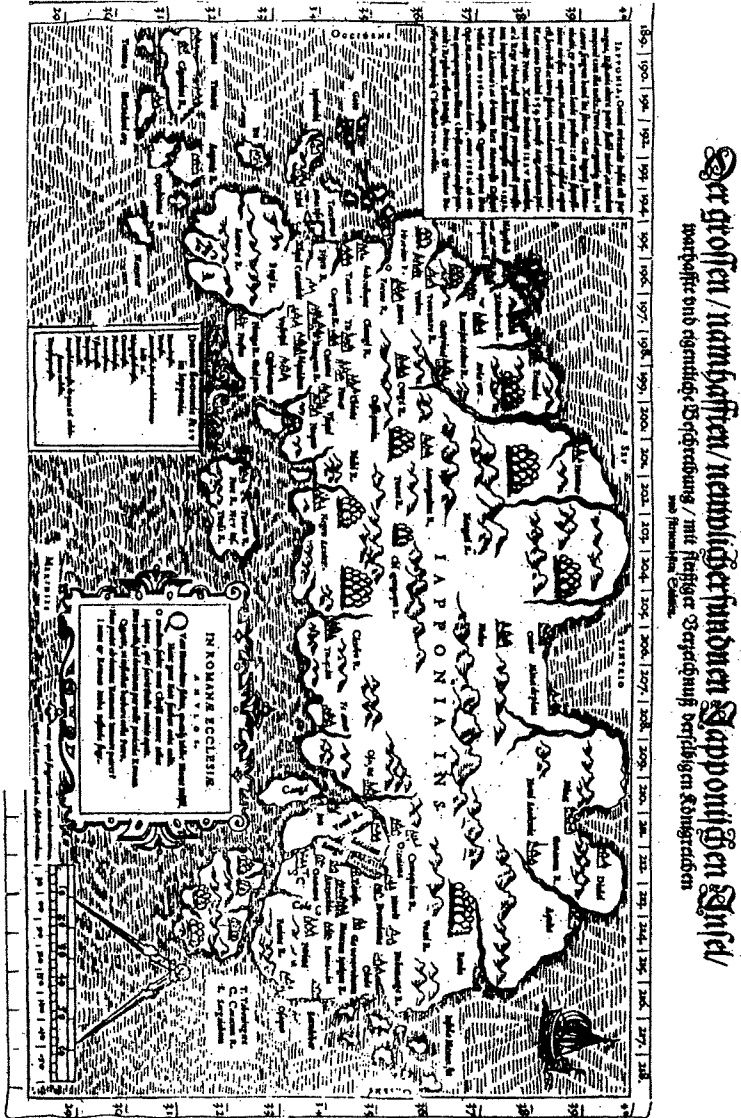
二、日本の国土、習俗、政治形態

国土と気候

『日本誌』本編の構成は前節で示したとおりであるが、内容的には（二）→（三）および（四）→（七）がまともな順序で記述されている。以下まず日本の国土、習俗、政治形態を螺旋を描くように記述した（二）→（三）の内容を検討したい。ツイザートによれば、日本は東洋の大洋に浮かぶ大きな島国であり、気候はスペインと似ているが、位置としては外アジア・下アジア (ausser vnd hinder Asia) である。日本はしばしば一つの王国と呼ばれるが、現実には多くの国と支配地 (Herrschaften) に分かれている（図1を参照）。日本はルシタニアつまりポルトガルから六〇〇〇マイル、インドのゴアから一〇〇〇マイル離れている。日本への旅は海路も陸路も非常に危険である。これは盗賊や殺人者の

図1：『日本誌』付録の広域日本地図

この地図は当時の行基式日本図をイエズス会士が改良したものであろうが、原図は不明である。ツイザート自身がイエズス会通信文などの情報を手がかりに作成したものかもしれない。Vgl. Beckmann, Der erste Japandruck, S. 154.



ただだけでなく、荒れ狂う海のためでもある。三隻の船のうち二隻が帰還できれば幸運である。またこの国は絶えざる戦乱の渦中にあり、しばしば支配者が交替している。これまで日本は諸外国とほとんど交流してこなかったから、広い世界を知らず、全世界を日本、シナ、その他という三部分に分けて把握するありさまである。⁽¹⁵⁾ 日本は支配権 (Monarchy) はただ一人の皇帝 (Kaysar) ないし上級君主 (Oberherr) のものであり、彼は日本語で「公方様 (Cubucama)」と呼ばれており、都 (Meaco) に居を構えている。しかし多くの諸侯 (Fürsten) や国主 (Landsherren) が次第に謀反を起こすようになり、君主の実権は失われて今では「公方様」の名譽的称号が残っているだけである。⁽¹⁶⁾

現在の日本は六六の小国に分裂しており、国主たちの専横ゆえに戦乱が絶えない。⁽¹⁶⁾
 日本の土地は貧しく、ポルトガルよりも荒涼として寒々しい。夏は猛暑、冬は極寒で大雪が降る。タンガ (Tanga 丹後) の国では家屋が雪に埋もれ、屋根から家に入り、数か月も家の中で暮らさねばならない。なお土地が痩せて実りがないのは、自然のせいではなく、住人たちの手入れが悪いからである。そもそも日本は空気も水も良い。⁽¹⁷⁾

容姿と生活習慣

ツイザートによれば、日本人は「かなり色白で、よく均整がとれている zinnlich weisfarbig/ wol proportionierter Ghimassen」。彼らは大部分、無帽で、小さな毛抜きを使って大きな苦痛を味わいながら自分で頭の毛を抜き、後頭部に二房の髪を残して髻 (Knopf) を結い、大切に手入れをする。男性の衣服は鮮やかに彩色されており、袖の長さは腕の半ばまでである。女性の衣服は男性のものより長く、形がよい。大部分の日本人は一人の妻をもつだけで満足しているが、ささいな理由で離縁する。女性の側から夫を見限り、別の男性と結婚することもある (逆のケースより少ないが)。日本の家屋は火事に弱い。しかし巧みに建てられており、清潔である。床は藁かイグサの敷物で被われ

ている。日本人はその上で服にくるまつて眠る。家の中では裸足であり、何も汚す心配がない。外出するときには靴 (Stiefel) を履くが、帰宅すると脱いでしまう。貴人や富者は小型の駕籠 (Santien) に乗る。日本には葡萄酒はなく、米から作った酒 (Getranck aus Reis) が飲まれている。日本人は鳥類を殺したり食べたりしない。海岸地方の人々は魚と米を食べている。小麦もあるが豊富ではない。常食は米と野菜と茸である。こうした食事で彼らは健康を保ち、長生きする。概して日本人は食事に關しては節制しているが、飲酒についてはそうでもない。しばしば客人をもてなす習慣があり、飲食の作法が重んじられる。日本人は、食べ物を手でつかむのは行儀に反すると考えており、二本の小さい箸で (mit zweyen Holzlinen) 食べる。夏も冬も日本人は耐えられる限り熱くした湯を飲む。日本人は肉を食べないが、それは彼らが異教の誤謬のなかにあり、迷信や戒律によって肉食を禁じられているからである。彼らは獣も鳥も殺さない。だから人々は塩漬けの魚、カブ、ダイコン、炊いた米などを食している。こうした食事に慣れていない異人は大いに空腹になる。ところによっては病人にタマゴを与える場合もある。⁽¹⁸⁾

名譽と尚武、礼節と学問

ツイザートは上述のように外面的な生活慣習などを描いた後、日本人の内面について詳しく報告している。ツイザートによれば、日本人は感謝の気持ちを大事にする人々で、親切や施しを受けたらその恩を決して忘れない。異人・外国人 (Fremden vnd Außländischen) でも日本人を訪問して何か役に立つことをしてあげると、返礼の訪問を行って感謝の言葉を述べる。そのさい何か見返りを求めることはない。日本人は「善良な性質と理解力の卓越性において、まことにわれわれヨーロッパの多くの国民に勝つてゐる sonst vbertreffen sie Warlich / an Güttigkeit der Natur vnd furtreffentlichkeit deß verstands / vil Nationen unsers Europe」。ポルトガル人のなかには、これと反対のことを

述べる者もいるが、それは彼らが海岸地方に住む人々としか交流していないからである。海岸地方の住人の習俗は内陸の農村地帯の人々と同じであり、彼らは「農民 Bauer」と考へるべきである。都市の住民とりわけ都の住民は、それらの人々を軽蔑し、「野蛮人 die Wilden」と見なしている。しかしながら、そう呼ばれている人々も、「市民的 Bürgerlich」とは言えないまでも、理解力・徳・友好的性質に欠けるわけではない。⁽¹⁹⁾

日本の「貴人たち die Edlen」は高い名誉を受けているが、現実には貧しい場合も多く、その貧しさを緩和するために嬰児を殺害することもある。被害に遭うのはとくに女兒である。日本人は非常に戦鬪的な民族であり、威厳を保つのに汲々としている。この点では古代ローマ人に比べられる。日本人は「名誉 Ehre」のためにしばしば戦争を起こし、数多くの戦死者を出し、敗北して屈辱を受けるくらいなら自害して果てる (töden sich selbst)。彼らは親を敬い、友を信じ、盗みや姦通などの悪徳を避ける。賤しい人々 (Gabel) のあいだでも貴人 (Adel) のあいだでも男子は一四歳になると刀と短剣を脇に差す。彼らは誇り高く、侮辱や軽蔑の言葉に耐えることができない。賭博は盗みと同じように悪いこととされている。他人の物を欲しがる情念につながるからである。日本人の男女の多くは読み書きができる。とくにそれは主要な町においてである。彼らは「市民的であり、洞察力に富み、学習意欲のある民 ein Bürgerlich, scharfsinnig vnd gelehrig Volk」である。彼らは印刷された書物や文書を所持している。印刷術 (Kunst der Truckerey) はヨーロッパで発明されるずっと前から彼らのもとで実用化されていた。ただしヨーロッパの印刷術とは大きく異なり、紙は樹皮でつくられる。日本には六つの有名な大学 (hohe Schulen) がある。一つは都に、他の五つは地方にある。ヨーロッパで用いられているような時計はない。そうしたものを彼らに見せると目を見張って観察する。日本人は理解力が豊かで、その習俗は穏やかであり、「また喜んで理性に従う lassen sich auch die Vernunft gern regieren」。彼らは「善と悪をしつかり区別する」ことが出来る können das gut von dem bösen fast

wol unterscheiden)。日本人は「まるでどこかの王宮で育ったかのような礼儀をもって mit einer solchen Höflichkeit als wären sie an Königs Höfen erzogen」互いに敬意を示し合う。しかし名譽を尊ぶあまり些細な原因で無益な争いを起こすこともある。これを除けば日本人は、徳と誠実さにおいて、他のすべての「新発見の諸国民 neuerfundne Nationen」に勝っている。日本人は欺瞞を嫌い、陰口を言わない。博徒と盗人は同じように死罪になる。小さな悪事は大きな悪事を呼ぶからである。日本人は戦術に長けており、武器のなかでは弓が得意である。たしなみは韻をふんだ詩を詠むことである。日本人の「強さ Stärke」「理解力」「市民的な深慮 Bürgerliche Fürsichtigkeit」「知恵 Weisheit」「品位 Würde」「技芸 Kunst」は諸民族を凌駕している。ただし隣国つまり中国から受容した慣習と宗教はその限りではない。日本人は異人との対話を好み、外国の習俗などについて些末なことまでしきりに質問をする。日本人のあいだでは主従関係が明確であり、従僕 (Knecht) は主君の命令を地面にひれ伏し両手をつけて聞く。日本には公共の牢屋はなく特別の刑吏も任命されない。主君および家父長 (Hausvater) が自ら一族郎党の処罰を行い、重大な罪を犯した者をすぐさま殺害する権限をもっている。ただし国主たちは刑吏を使っており、謀反人などを処刑させている。⁽²⁰⁾

ツイザートは上述のように、名譽と武勇を尊ぶ精神、礼儀正しさと、読み書きの能力、厳しい規律、主従関係などについて詳述しているが、それらの情報はおおむねザビエルやコスメ・デ・トルレス (Cosme de Torres, 1510-70) の通信文に依拠している。⁽²¹⁾ しかしながら、日本人および日本文化は「市民的」⁽²²⁾ であるという評価はツイザート独自のものである。それはヨーロッパの自治都市の市民ならではの見解である。

三つの身分、茶の湯の世界

ツイザートによれば、日本には三つの身分 (Stände) がある。すなわち諸侯 (Fürsten und Herren) の身分、坊主の身分、平民の労働者および手工業者 (die gemeinen Arbeiter und Handwercksleute) の身分である。貴人たちは、きわめて貧しい場合もあるが、それを恥とせず、民衆によつて尊敬されている。その地位はいくら金を出しても平民 (gemeines Volk) の手には届かない。商人 (Kaufmann) はいくら裕福でも尊敬されない。貴族 (Edle Geschlechter) と平民のあいだでは、前者がいかに貧しく後者がいかに富んでいようと、婚姻は行われない。裕福な貴人たちには、賓客との離別にさいして茶碗などの家宝を見せる習慣がある。茶碗とは、甘みのある茶の葉 (Kraut Chia) の粉末を使った飲物を入れるうつわである。日本人はこの抹茶をクルミの殻一杯ほど茶碗に入れて熱い湯を注ぐ。この茶碗はイタリア人のあいだではポルチェラーナ (Porcellana) と呼ばれ、ヨーロッパではたいへんな高値がついている。抹茶も非常に高価である。日本の貴族は茶を飲むに先だつて宴席を設ける。料理は芸術作品のようで、会食は静かに整然と行われる。茶道具 (Instrument) として必要なのは、鉄の茶釜、陶製の茶碗、茶杓、茶筌 (Trichter zu aufspulung des jrdinen Geschirrs)、鉄の三脚 (五徳 Dreyfuß)、湯を沸かすための炉である。これらのものには、ヨーロッパにおける金の指輪、ルビーやダイヤモンドの宝石や首飾りに負けないほどの価値が認められている。一家の主人は、会席が終わると茶をたてて客人に勧め、その後で宝物を見せる。茶道具は信じられないほどの値段で売られており、六〇〇クローネの茶釜、一〇〇〇クローネの五徳、それよりもっと高いものさえある。茶器は贅沢な絹布で包まれ、さらに高価な箱に納められている。とくに都では三〇〇〇から五〇〇〇クローネの茶器さえ出まわっている。日本人の宝物といえは刀剣もそうである。⁽²³⁾

蝦夷地の人々

次にツイザートは、都から三〇〇マイル北の広大な土地に住む「野蛮人 *wilde Leuth*」に言及している。彼らの衣服は獣の皮でつくられ、その全身は毛で被われ、顔には濃い髭が生えているという。彼らは葡萄酒を欲しがり、戦いを誇りとし、絶えず日本人を恐怖に陥れている。彼らは戦争で傷を負うと、その傷を塩水で洗う。これは彼らの唯一の医療である。彼らには胸に鏡をさげ、剣を頭に縛りつける風習がある。彼らは礼拝 (*Gottesdienst*) を行わず、ただ天を拝むだけである。彼らは日本帝国 (*Japponisches Reich*) の強大な秋田 (*Aquia*) の国にあつて常にその生業ゆえに旅をしている。秋田人 (*Aquitainer*) が彼らのもとに宿泊すると、多くは彼らによつて殺害されてしまう。そのため、あえてそうしたことをする秋田人はますます少なくなつていゝ⁽²⁴⁾という。

三重の統治

つづいてツイザートは、日本の統治のあり方について述べている。ツイザートによれば、日本では三重の統治が行われている。もつとも身分が高い支配者は異教の祭祀を司る教主 (*Oberste Verwalter*) である。あらゆる祭祀は教主の裁定や法令 (*Erkändnuß und Satzungen*) に従つていゝ。四分五裂の坊主たちの宗派 (*Secken*) には何かを定める権限はなく、教主の書状と印章による認可を待つのみである。この教主には「市民的な事項や職務 *Bürgerliche Sache vund Empter*」の遂行を免除される特権 (*Freiheit*) がある。教主はヨーロッパの司教に相当する「ツンド *Tundos*」を選任する。地域によつては諸侯が「ツンド」を選ぶ場合もある。「ツンド」には寺への巡礼が行われる聖日 (*heilige Tage*) に人々に肉食を許可する権限がある。宗教の最高指導者は中国では靈性と知恵によつて選ばれるが、日本では富貴な家系の者がその地位につく。教主は都に住み、莫大な租税を受けとり、王侯たちとしばしば戦いを交えてきた。教主の館には三六六体の偶像があるといゝ⁽²⁵⁾。

世俗の支配権は二人の頭 (Vogt) によって分有されている。その一方は王 (Vö) と呼ばれる榮譽の頭で、もう一方は司法 (Gerichtshandlungen) を管轄する頭である。王は世襲によって即位し、偶像のように崇拜されている。王には素足を地面につけることが禁じられており、それを行うと廢位される。王はいつも宮中におり、外出するときには駕籠を使うか高い木靴をはいて歩く。王が座すときには、一方の側に劍を、もう一方の側に弓と矢を置く。王は黒い肌着、赤い衣、絹の衣を重ね着し、帽子をかぶり、額を赤くまた白く塗る。王の権限は多種多様な位階と名譽の称号 (Titel des stands vnd der Ehren) を授与することである。位階によって文書に用いる花押 (Zeichen) も異なる。豊後の国主 (König von Bungo) などは短い期間に三四回も称号を改めた。各地の国主たちは、より高い位階を求めて王に贈り物を繰り返している。そのため王には、領地、地代、定期的収入がないにもかかわらず、大きな富の蓄えがある。王が位を追われるのは三つの場合である。素足を地面につけたとき、殺人を犯したとき、平和を乱したときである。しかしそれでも王は死罪にはならない。王とは別のもう一人の頭は「最高裁判官 der oberste Richter」である。彼には裁判だけでなく、戦争を始めたたり反乱を鎮定したりする役割もある。諸国の国主や公 (Herzogen) たちも生命財産を賭けて加勢しなければならぬ。不服従者がいれば所領をとりあげて隣国の領主に与える。このように三つの権力は、それぞれ異なった役割を担っている。しかし諸国の実力者たち (die Gewaltigen) は、それらのお上 (Oberkeiten) の支配に全面的に服従しているわけではない。当世においては、法の秩序よりも武力に訴える者が多い。

三、白い肌のアジア人

白人説の確立

前述のようにツイザートは、日本人の理性や善良な性質は「ヨーロッパ人以上」であると述べている。この日本人観は、当時ヨーロッパ人が「選択」することのできた二つの日本人観のうち的一方、すなわち後述するザビエル、オルガンティーン、ヴァリニヤーノらの見解に従ったものである。これとは正反対の、たとえばフランシスコ・カブラル（後述）などの日本人観は明らかに無視されている。わずかに、「ポルトガル人のなかには、これと反対のことを述べる者もいる」と述べているだけである（前節の「名誉と尚武、礼節と学問」の項を参照）。ツイザートの『日本誌』は、すでに述べたように「教化」「建徳」の目的で書かれている。日本人をある種の「模範」とするためには、ヨーロッパ人と日本人のあいだに基本的な共通点がなくてはならない。とりわけ「肌の白さ」と「理性」は重要な要素である。ヨーロッパ人を凌駕する者は「白い肌」の持ち主でなければならぬ。後に述べるように、当時の平均的なヨーロッパ人にとって、肌の白さと内面的な優秀性は一体であり、「黒い肌」と「理性」は結びつきようがなかった。だからツイザートは、日本人の「白い肌」に言及することを忘れなかったのである。

さらにツイザートは、近世の日本にヨーロッパ的な市民世界を投影し、日本人の「市民的な徳」^{ブルゲーリヒ}を賛美している。こうした記述はヨーロッパの市民世界の読者に共感呼び起こしたであろう。なおツイザートは日本人の過度の名誉欲（Ehrgelzigkeit）と自尊心を欠点として描いているが、これはヨーロッパ人にとっては意外なことでも珍しいことでもなかった。「名誉」の観念は貴族・市民・農民が織りなすヨーロッパ文化の基層をなしていたからである。ツイザートが『日本誌』を書いたころ、ヨーロッパとりわけドイツ語圏の都市市民は自分自身と家門の「名誉」を背負って生きており、挑発や侮辱つまり名誉の侵害に過敏に反応し、暴力的な手段で報復することも多かった。それはまさに都市世界の「習俗」であった。²⁷「一四歳で帯剣し、誇り高く、侮辱や軽蔑の言葉に耐えることのできない日本人」の姿を描いたとき、ツイザートは近世ドイツ語圏の市民文化と日本文化を重ね合わせていたのではないだろうか。ツイ

ザートの『日本誌』は、尊敬すべき市民的な徳と礼儀を備えたヨーロッパ人以上に理性的な「白い肌のアジア人」の物語なのである。

日本人の身体的特徴に関する記述はイエズス会士たちによってしばしばなされてきた。フランシスコ・ザビエルは一五五二年に端的に「日本人は白人です」と述べ、「日本人は非常に賢く、思慮分別があつて、道理に従い、知識欲が旺盛である」と論じている。ゴンサロ・フェルナンデス (Goncalo Fernandez) は、一五六〇年の書簡に「この国民は色白く見識あり、甚だ礼儀正しく、大に衣服に意を用ふ」と記している。巡察師アレシヤンドロ・ヴァリニャーノ (Alessandro Valignano, 1539-1606) も、ザビエル以来の「白人説」を踏襲し、一五八三年に出版した『日本諸事要録』に次のように書いている。日本の「全土には、きわめて礼儀正しく、深い思慮と理解力があり、道理に従う白人者が住んでいる」。「東洋のあらゆる人々の中で、日本人のみは道理 (razon) を納得し、自らの意志 (libre voluntad) で (靈魂の) 救済を希望し、キリスト教徒になろうとする」と。ヴァリニャーノの日本観に影響を与えたソルド・オルガンティーノ (Soldo Organino) は、「日本人は全世界でもっとも賢明な国民に属しており、彼等は喜んで理性に従うので、我等一同よりはるかに優っている」と一五七七年に書き記している。ザビエルを初めとする宣教師たちの言葉には、明らかに、当時のヨーロッパ人の文明観・人間観が色濃く反映している。「肌の白さ」は「理性」や「礼儀」と分かちがたく結びついており、それらは「文明人」に欠かせない外面的・内面的要素を構成するのである。

ところでザビエルは、ヴァリニャーノとは違って中国人も日本人以上に「優秀な白人」であると考えていた。⁽²⁹⁾ いずれにしても「日本人白人説」は、「理性的人間説」と一体である。中世以来のキリスト教神学における「理性」とは、周知のように、人間が「善」に向かつて前進できるように神が被造物の内奥に刻みこんだ「自然の光」のことである。

ザビエルはトマス・アクイナスを下敷きにして次のように述べている。「シナから日本へ諸宗派が渡来する以前から、日本人は殺すこと、盗むこと、偽りの証言をすること、その他十戒に背く行いが悪いことであると知っていましたし、行ったことが悪いことであるしるしとして、良心の責め苦を感じていました。なぜなら、悪を避け、善を行うことは人の心に刻みこまれていたのです」。「律法が書き記される以前に、すでに神の掟があつて、人びとの心の中に刻みこまれていたのです」と。⁽³⁰⁾ザビエルからヴァリニャーノにいたる「日本人白人説」は、その後ヨーロッパ世界の幾多の知識人たちに継承されることになる。⁽³¹⁾ヨーロッパのドイツ語圏に日本を紹介したツイザートも、もちろんその一人である。

封印された黒人説

新世界の住民のなかで外見的に「白い人」と認定されなかった人たちには、「理性」の具有も認められなかった。たとえばザビエルは、モルッカ諸島の住民について次のように述べている。「この島じまの住民たちはきわめて野蠻で、背信行為は日常のことです。彼らの皮膚は黒いというよりも黄色がかつた褐色をしていて、極端なまでに思知らずです。この地方の島じまでは、他の部族と戦い、喧嘩して人を殺した場合、殺された人の肉を食べます」と。⁽³²⁾「理性的な白人」観の裏面には「理性のない黒人」観があつた。ヴァリニャーノも同じ観念に囚われており、『インド諸事要録』（一五八〇年）に「インドにおける布教活動が通常把握したものは、黒人と無能者であつた」が、日本の「キリスト教徒はインドにおけるよりもずっと改宗前に良く準備され、その才能の中に（信仰は）はるかに深く浸透した」と書いている。⁽³³⁾アイヌは「日本島」の住人であるが、ルイス・フロイス（Luis Frois, 1532-97）は彼らを日本人とは違う未開人と見なした。⁽³⁴⁾ツイザートもフロイスの理解を踏襲し、「礼拝を知らない野蛮人」として描いてい

る。この視点は、後述する「インディアス」におけるコロンプスの視点と同じであった。⁽³⁵⁾

日本人は知らないあいだにヨーロッパ世界において「理性的白人」の地位を得た。しかしヨーロッパには正反対の見解もあつた。ヴァリニャーノによつて辞任に追い込まれた日本布教長フランシスコ・カブラル (Francisco Cabral) は、日本で暮らしながら日本語を学ばず、日本の習俗を嫌悪し、日本人修道士にはラテン語やポルトガル語を教えなかつた。ヴァリニャーノによると、カブラルは日本人を「黒人で低級な国民と呼び、他の侮辱的な表現を用いた」。

「日本人は黒人であり、まったく野蛮な風習を持っている」とカブラルは確信していた。「支那人や日本人をも黒人と呼ぶ習慣になつているポルトガル人」は実際に多かつたのである。⁽³⁶⁾ 天正遣欧使節がイタリア各地で「インド王子」や「コンゴ王の大使」(豊後 Bongo とコンゴ Congo のとり違え) と誤解された背景には、そうしたアジア観があり、そのアジア観は広義のインディアス観および新世界観と区別できないものであつた。⁽³⁷⁾ もし当時日本にいたイエズス会士のあいだでカブラル派がヴァリニャーノ派を抑えて日本布教および日本情報の発信を独占していたとすれば、日本人は、やはり本人たちが知らないあいだに「理性のない黒人」の認定を受けていたかもしれない。それは単なる「人種」の分類にはとどまらない。当時ヨーロッパにおいては、新大陸の「野蛮な先住民」がそもそも「ヒト」なのかどうかをめぐつて激しい論争が繰り広げられていた。⁽³⁸⁾

インディアスに到達したコロンプスは、探検した島々で出会つた先住民(インディオ)について、航海誌(一四九二年)に次のように記している。彼らは「世界一、善良で従順な人々」であり「カナリア諸島の人達と同じ肌色で、白くも黒くもない」。「よい姿をしている」。「宗教を何ももつておらず、偶像崇拜をする者でもない」。「命令を与えて働かせ」「われわれの習慣を教えれば」「利巧なよい使用人になる」と。またコロンプスは、インディオのなかには意外にも「エスパニヤ人だといえるくらいに色の白い若い女」も混じっていると報告している。⁽³⁹⁾ コロンプス自身は中南

米の先住民にキリスト教を信じさせて「よい使用人」にしようと考えていたが、「理性を備えた白人」に分類されなかった彼らは、けつきよくは奴隷として、つまり「ヒト」にあらざる「ケモノ」ないし「モノ」として扱われるようになった。インディアスの征服当初から奴隷化の対象にされていたのは「カニーバ」ないし「カリベ」(食人種)であり、国家や文字をもつ種族は一定の評価を受けていた。しかし「カリベ」「非カリベ」の区別はきわめて恣意的であり、奴隷化の波はやがてすべてのインディオに及ぶことになる。ヨーロッパ人の支配に対するインディオの不服従や反乱も、全面的奴隷化の一因であった。⁽¹⁰⁾

一方ザビエルやヴァリニャーノは、カブラルのような宣教師たちが抱きつづけていた「野蛮な日本の黒人」のイメージを封印し、日本人を「理性的で礼節をわきまえた白人」の列に加えることに成功した。その間この二人は、スペインに「日本征服」を断念させる働きかけも行っていた。ザビエルは一五五二年、ポルトガルにいる同僚に宛てて、「スペインの皇帝カルロス五世かカステイリヤ国王にメキシコを経由して銀の島「日本」を探検する艦隊をこれ以上派遣しないように警告してもらいたい」と書き送っている。その後一五八二年にはヴァリニャーノが、フィリピン総督に宛てて「日本人はたいへん高貴で、能力があり、理性的に判断する。征服できるとは思えない」「住民は非常に強く、絶えず戦っているので、武力をもって屈服させることはできない」と警告している。⁽¹¹⁾

千々石ミゲルの人種論

次に天正遣欧使節の対話録(イエズス会士たちの代筆)に目を向けてみよう。日本を出たことのない有馬王の兄弟レオが尋ねる。「かくもたくさんいるという黒い人々のすべての種族は、一体どんな法律、どんな宗教の下に暮らしているのだろうか」。正使千々石ミゲルが答えて言う。「自然がつくった畜生のごとく、大部分は自己の欲望と罪とに

耽り、何の修養も、何の洗練された感覚もなく暮らしている。だからあるヨーロッパの哲学者がかの種族こそ奴隷になるために生まれてきたのだといったのは、確かに当たっている。宗教についていえば、彼らが神に関して抱く想像・妄想の激しさときたら、これを最大の証拠として、あんなに荒唐無稽な非理・迷夢を信じるすべての異教徒が、いかに大なる迷蒙のなかにいるかが、容易に想像できるほどである」と。少年使節は人種観も含めて歪んだヨーロッパ中心主義に陥っていた。ミゲルによれば「ヨーロッパが世界のあらゆる部分の中でもっとも勝れたものであって、神はその御手に溢れるばかりにもっともよきものを多量に盛ってヨーロッパにこれを与え給い、積み上げ給うた」。

「ヨーロッパの住人は色が白く顔が優美で輪郭は美しいが、アフリカ人は大部分が黒い人たちで、アジア人は一般に少なくなるともくすんだ色で暗色であることがわかる。その中のある人たちは色が白く知能に勝れているといっても、色の薄黒い残余の者はすべてきわめて粗野で、性質が洗練されていないことになる」。「ヨーロッパにあのように栄えている真の宗教であるキリスト教は、ヨーロッパの民族を洗練するに大いに役立つている。それはなぜかといえば、人間は理性と知性によつて獸性を脱却するものであつて、その知性がますます先鋭で明晰となればなるほど、人間はさらに文明的になり、さらに人間らしくなる」からである。「さて「この地図の」ここに見えるのがアメリカであつて、広いことはもつとも広いが、そこにはどす黒いきわめて下等な人種が多数に住み、その全部が、少数のヨーロッパ人に打ち従えられて、ヨーロッパの権力の下に生活し、ヨーロッパ人を自分たちに対する当然の支配者のごとく⁽⁴³⁾考えているくらいだ」。

正使ミゲルが「アジアのなかのある人たちは色が白く知能に勝れている」と語つたとき、彼の念頭にあつたのは「白い肌のアジア人」としての日本人および中国人である。早くも日本人のあいだに、少なくとも感覚のレベルにおいて、ヨーロッパ型の人種差別と植民地主義の擁護者が生まれていた。⁽⁴³⁾ところで、一七世紀初頭の棄教者、不干斎ハ

ピアノは、排耶書『破提字子』（一六二〇年）のなかで、「人間に善悪の分別を与え人間たらしめる」という「アニメ・ラシヨナル」（理性的な魂）の教えを「唐人の寝言のやうなる事」と揶揄している。⁴⁴しかしながら、一六世紀後半以降、ヨーロッパ人が日本人にある種の敬意を払いつづけたのは——棄教者ハビアンにとっては余計なお世話であったかもしれないが——ザビエルを筆頭とする宣教師たちが日本人は「アニメ・ラシヨナル」を備えた「人間」であると声を枯らして訴えたからにはかならない。こうしてマルコ・ポーロが残した二つの日本人像の一方が地歩を固め、ドイツ語圏ヨーロッパにも受容され、ツイザートの『日本誌』のような、日本人を主人公にした建徳書さえ出版されるようになったのである。

四、日本の迷信と偶像礼拝

阿弥陀仏と釈迦如来

ツイザートは日本の国土、習俗、政治形態を論じた後、日本人の宗教について詳細に解説している。前掲の目次の（四）から（七）の部分である。ツイザートによると、過度の名誉欲は別として日本人は概して理性的であるにもかかわらず、その宗教生活は迷信と誤謬（Aberglauben vnd Irrthumen）に満ちている。日本の宗教界は多くの宗派によって分裂しており、それぞれの宗派が信徒を集め、謬説を広めている。日本の悪魔的な偶像（Teuffische Abgötter）のなかでもっとも崇拜されているのは阿弥陀（Amida）と釈迦（Kaca）である。人々はこれらの偶像に「健康、名譽、富、永遠の救、gesundheit/ ehr/ reichthum/ vnd die ewige Seligkeit」を求めて祈る。日本の異教の祭司たちは阿弥陀や他の偶像の名のもとに「免罪符 Ablaßbrief」を作って民衆に売りつけ、大金を巻きあげている。身につければ悪魔を除けることのできるというお札も高く売っている。宗派は二二ほどあるようだが、最大勢力は阿

弥陀と釈迦を拝む二つの宗派である。人々は好みの宗派を選ぶことができる。礼拝と迷信は宗派間で大きく異なっている。しかしそれらは「人間の不死 *vnsterben des Menschen*」を信じる点では同じである。人間だけでなく「理性のなす獣 *die vnvernünftigen Thier*」や草木も「もどいた場所に帰って行く *an das Orth daher sie kommen/widerkehren*」と彼らは教えている。⁽⁴⁵⁾

多くの宗派のなかでもっとも勢力のある上述の二宗派は、中国から日本にもたらされた。阿弥陀の信徒たちは来世において (*nach diesem Leben*) 永遠の果報ないし苦しみ (*ewige Belohnung oder Peyn*) を受けると信じているが、悪魔の力も同時に信じている。人々は偶像と悪魔を拝むために寺院に詣で、坊主に献金をする。王侯は戦争を始める前に寺院におもむき、必勝を祈願する。そして祈りが叶ったときには大金を貢ぐ。日本人のあいだで広く拝まれている釈迦は、王子の生まれで学問を修め、八〇〇〇回も転生した (*achtusentmal geboren*) という。釈迦は後世の人々に邪説をしたためた教典を残したが、これは法華経 (*Foquetun*) と呼ばれている。この教典なしにはだれも永遠の救いを得ることができないとされている。この書物によれば草木も救われるという。阿弥陀と釈迦以外にも多くの偶像が拜まれており、太陽や月、獣を崇拜する人々もいる。偶像の寺には大日 (*Daicini*) という三頭の悪魔的な像があり、尊崇を集めている。それらの頭は、日と月と四大 (エレメント) の力を示している。日本人は鳥類を崇め、決してこれを殺さない。鳥類のための施療所 (*Spital*) があり、病気の鳥や傷ついた鳥はここで看護され、治ったら空に放たれる。⁽⁴⁶⁾

坊主の悪徳

ツイザートによると、日本では僧院に入る者の数が非常に多い。学識のある僧正は弟子を集め、一人ひとりに問

かける。たとえば人間の魂はいつ肉体を離れ、ふたたび肉体に戻るかといった問いである。弟子たちは一時間ほど熟考して答えを出す。良い答えを出した者は僧正に褒められる。良くない場合は懲らしめを受ける。僧侶は地獄絵を見せながら民衆に説教を行う。恐ろしさのあまり泣きだす女性もいる。僧侶は盗みや偽証をやめられない悪人の例をあげ、悪魔自身よりも邪悪な人間がいると説く。しかしながら、日本の民衆は聖職者よりも敬虔であり、従順である。坊主と呼ばれる人々は男色 (Sodomy) の悪徳に耽っており、それを隠そうともしない。戒められてもあざ笑うだけである。坊主たちは手習いとしつけ (Lehr und Zucht) のために良家の少年を僧院に預かるが、恥知らずにも坊主たちはそうした少年と交わるのである。坊主たちの僧服には黒や灰色があり、ヨーロッパの修道士のものとはよく似ている。坊主たちのもとには尼僧の集団もいる。彼女たちは妊娠すると服薬し、墮胎を行う。坊主たちは戒律によつて肉も魚も食べてはならず、飲酒も禁じられている。食事は日に一度だけで量も少ない。民衆も血のある獣の肉は食べないから、その点では坊主に従っている。坊主たちは女性との交わりを禁じられているが、密かにその戒めを破っている⁽⁴⁷⁾。

僧院に入りたい者は厳しい試練を受けねばならない。志願者たちは二、三人で高い山に登つて苦行をする。その間に悪魔が様々な姿で彼らの前に現れる。この戦いに勝つた者が僧衣をまとうことができる。僧院のなかで非常に有名なものは高野山 (Goya) であるが、その寺を開いたのはコンベンダシス (Combandaris 弘法大師) である。この人物は恥ずべき悪魔の戒律と悪徳を教え、書き記し、欺瞞によつて聖人の名を得た。コンベンダシスは高齢に達したとき、みずから墓に入った。その扉を開けることは固く禁じられている。というのもコンベンダシスは死んではおらず、弥勒 (Mirozu) という高德の人が到来するのを待っているからだという。弥勒は千年を数千倍した年を経て日本の地に来ると信じられている。コンベンダシスはその時ついに墓から出るのである。彼が墓に入った記念日には多くの

参拝者が集まる。寺には六〇〇〇人も坊主が住んでいる。女性が入山することはできない。⁽⁴⁸⁾

僧院の暮らし、さまざまな宗派

日本の僧院には大きな書庫があり、食堂があり、鐘がある。この鐘で人々に祈りの時間が知らされる。夕刻には僧正が弟子たちに講話を行う。真夜中には祭壇の前で釈迦の書物からとった祈りが唱えられる。これはヨーロッパの修道院の朝課 (Metten) のようなものである。夜明けには一時間の黙想が行われる。坊主には髪も髭もない。僧院には広く美しい回廊があり、そこには仏 (Fouques) と呼ばれる偶像の礼拝室がいくつも設けられている。日本では一年をつうじて多くの祝祭が行われている。死者の追悼も行われ、霊前には食物が供えられる。大仏 (Daibut) と呼ばれる偶像のためには特別の寺が建てられている。大仏というのは、彼らの言語では、大いなる聖性を備えた人という意味である。宗派によっては創設者を偉大な聖人として崇拜している。たとえば、今から五〇〇年ほど前のネキロン (Nequiron 日蓮) とらう法華宗 (die Fowexanische Sect) の開祖や、民衆のあいだで広く崇敬されている一向宗 (die Ioxische Sect) の開祖などである。日本では悪魔の奸計によって多くの殉教者が出る。というのも、悪魔は坊主や俗人が罪を犯すと巡礼や断食を行わせ、高い山にある寺に参らせ、転落死する者も多いからである。悪魔を阿弥陀の名で拜む「山伏 Yamabux」と称する人々もいる。「山伏」とは「谷の戦士 Kriegleut der Thaler」という意味である。彼らは悪魔と交わる修験者であり、直立して眠らず、ごくわずかの食事しかとらない。「前鬼 Genguis」と称する悪魔的な一族ないし徒者 (Gesindt) の集団もいる。人々は遺失物や盗難品を取り戻すために「前鬼」に相談をもちかけ、それらがどこにあるかを言い当ててもらおう。彼らは山岳に住み、絶えず日光と風雨、暑さと寒さに曝されているため、醜く日焼けしてる。彼らの頭には角のようなものが生えているらしい。ところで阿弥陀を拜む者のなか

には、現世を去つて天国 (Paradise) に入ることを見望し、地面に樽のような坑を掘つてそこにすわり、地表から管を通して口にくわえて息をしながら、偶像に祈りを捧げ、長い時間をかけて餓死する者もいる。彼らはそれによって至福を得られると考えている。みづから命を絶つことは名誉ある行いだと教唆するのは悪魔である。⁽⁴⁹⁾

甲いと盂蘭盆の習俗

日本人が死者を弔う儀式はきわめて迷信的である。以下述べるのは都での習慣である。死者の遺体は正装した友人たちによって甲いの場所に運ばれ、そこで火葬にされる。列席者は白い服を着る。彼らのもとでは白が悲しみの色だからである。富貴な人が亡くなつた場合は、駕籠に乗つた人々が葬列を組む。しんがりを行くのは坊主たちである。坊主たちは故人が生前崇敬していた悪魔の名を唱える。斎場は広く、厚い布で四方を覆われている。両側に置かれた台の上には、あらゆる種類の食物が供えられている。魚、肉、イチジク、レモン、菓子などである。葬儀の三日後、故人の息子がふたたび斎場におもむき、遺骨と歯と灰を拾い集め、金箔をほどこした壺に入れて自宅に持ち帰る。それから遺骨は墓地に運ばれて埋葬され、上から下まで悪魔の名を書いた墓石がかぶせられる。その後は遺族が毎日墓を訪れ、お供えをする。故人の命日には大がかりな宴が催される。これはだれも行ふべき義務である。権門の場合にはこうした宴が十日間もつづく。そのさい坊主たちはご馳走をふるまわれ、贈り物を受けとる。

日本人はみな八月の特定の日に集まつて笛や太鼓を鳴らし、祭りを挙行する。またこの時期に二日にわたつて死者の追悼を行う。一日目の夜に人々は戸口に数多くの灯火をともし、ある決まつた場所に祖先の霊を迎えに行き、米や茸などの食べ物を供える。貧しい人たちは湯を供える。人々は、霊の飲食が終わる頃合いを見計らい、その霊を家に招き入れ、ふたたび食事を出す。二日目に人々は、霊が道に迷わぬように、かがり火で帰る道を照らして送り出す。

家に帰ると彼らは屋根に小石を投げる。これは霊が家に残っているかもしれないからである。とくに幼児の霊は追い出されるのを嫌がる。人々が霊に食物を差し出すのは、天国への道のりが千マイルの千倍という長さで、その旅には三年を要し、滋養が必要だからである。この日人々は墓を清め、祖先の墓を守る坊主を崇める。⁽⁵⁰⁾

信徒の祈り、坊主の説法

ツイザートによれば、キリシタンであれ異教徒であれ、日本人が祈りと礼拝に注ぐ熱意は明らかにヨーロッパのキリスト教徒に勝っている。ヨーロッパ人のいい加減さに良心が痛み、赤面するほどである。日本人の多くは異教の誤謬に囚われているとはいえ、彼らが寺院を訪れて跪き、手をあげて数珠をかざし、「南無阿弥陀仏 Namu Amida Amu」と絶え間なく叫ぶさまは驚嘆に値する。この言葉は「阿弥陀仏よ救いたまえ」という意味である。この祈りは一時間もつづく。日本人は何をするときにも、たとえば何かを買ったり売ったりするときにも、この祈りを樂しげに唱える。何か特別の目的で寺院に参つて祈つた場合は、僧正が信徒の頭に手をかざして祝福を行う。死罪を言い渡されたり敵対者によって命を奪われざるをえなくなつた者は、寺院に逃れて阿弥陀に祈りを捧げ、坊主の祝福を受け、しかる後に欣然として自ら命を絶つ。

日本の坊主は説教に情熱を傾ける。説教を任された坊主は一年のうち一〇〇日これを行わなければならぬ。説教壇は寺院のもつとも重要な目立つ場所に据えられており、絹の天蓋がついている。坊主は白い衣と赤か紫の衣を重ね着している。壇の前の台の上には一冊の書物と鈴が置かれている。他の坊主たちは祭壇の前にすわり、目を閉じている。信徒たちは説教の前に皆で祈りを捧げる。祈りは鈴の音とともに始まり、一時間つづく。それから大鐘が鳴り響き、人々は沈黙する。そして説教者が壇に上がり、説教を開始する。着座した坊主はまず周囲を見回し、鈴を鳴ら

して人々を静まらせ、それからくだんの書物を読み上げ、講釈を行う。説教を行う坊主はきわめて能弁であり、民衆に敬われている。しかし坊主は、持ち前の貪欲さゆえに信徒たちに自分と寺のための喜捨を勧め⁵¹る。

日本の建築、都の偉容

ツイザートによれば、日本人は建築術に長けている。一般の家屋だけでなく、都市や城の建設もそうである。都市は非常に大きく、城は堅固で美しい。とくに一五六〇年に築かれた奈良の城はすばらしく、それは高い石垣の上にある。塔も城壁もすべて人の手で切り出された石でできている。それらの塔や城壁は、一般の家屋と同じく美しい瓦葺きである。多彩な彫刻を伴うそれらの瓦は、指二本の厚さがあり、長い年月にわたって風雪に耐えうる。城壁の漆喰は砂土ではなく白い紙を使ってつくられている。タマリの港 (Port des Meers Tamaris) から遠くないところにある城も有名である。この城は自然環境の良さと建築術の巧みさの点で他のすべての城を凌駕している。この城もやはり高い山の上にある。城にたどりつくまでには一〇の防塁があり、それらには跳ね橋が架けてある。石垣の下の深い堀は信じがたい費用と労力を費やして造成されており、目眩に襲われるほどである。城内の家屋には杉材が使われ、板張りの回廊には古い時代の歴史を描いた壁画が飾られている。図像のない場所と柱には金箔が施されている。日本人がパゴダ (Pagode) と呼ぶ仏閣もすばらしい。日本の寺院は一万三千を数えるという。寺院も莫大な費用をかけてつくられている。内部には七〇から一〇〇の杉の円柱が等間隔に並んでいる。寺には多くの偶像が置かれており、それらは金属か石か木でできている。こん棒を手にして悪魔を踏みつける巨人の像もある。これらの二つの像は多聞天・毘沙門天 (Tomendea vnd Besamondes) と呼ばれ、寺の門の外に番人として立っている。門の内側には獅子の像がある。寺には大きな鐘楼があり、その鐘の音は遠くまで聞こえる。寺の庭には小川が流れ、池もある。また草地と杉

の森がある。それらの杉は整然と植えられており、垂直に高く伸びている。たった一本の杉から大きな舟ができる。森から寺門に至る道には石の柱が立ち並び、昼も夜も明かりのともった灯籠が二列に立ち並んでいる。灯籠には奇進者の名が刻まれている。⁽⁵²⁾

都は大きな町であるが、うちつづく戦乱の被害を受けて荒廃している。かつてはきわめて大きく立派な町で、長さ二万二〇〇〇歩、幅は九〇〇〇歩もあったという。都には九万户の家があり、異教の大学 (Hohe School) が一つ、学院 (College) が五つある。また随所に坊主と尼僧の寺がある。多くは戦乱で焼けたが、以前は七〇〇〇を数えたという。もちろんまだ残っているものも多く、そこでは悪魔が崇拜されている。なかでも壮麗なのは、そのむかし日本の皇帝が建てさせた阿弥陀の寺である。堂内の回廊の両側には五〇〇体、合計一〇〇〇体の観音像 (Canons) がある。どの像も三〇の手をもち、胸には七つの顔がある。また頭には王冠を戴いている。これらの像や鐘や鎖は下から上まで純金で被われており、参拝者を瞠目させる。そのためこの寺には諸国から多くの人々が訪れる。すぐ近くには森があり、そのなかにも五〇の僧院がある。都にはまっすぐに伸びた大通りがあり、さまざまな手工業者たちが出している。都の中央には阿弥陀の寺があり、昼夜を問わず多くの人々が訪れて祈りを捧げる。丘のふもとには古い大学といくつもの僧院があり、それらの建物は小川に囲まれ、入り口は一つだけしかない。⁽⁵³⁾

都の寺院に関する叙述の最後にツイザートは次のように述べている。「いにしえから異教徒たちのもとでは独自の寺院、上級・下級の聖職者、祭壇、祝祭、聖歌、祈禱、祝福、灯明、蠟燭、鐘その他を用いた習慣や儀式が保たれてきた。それらは永遠の神ご自身が旧約において信徒たちのために定めたものと、また新約においてキリスト教徒の正しいカトリックの慣行のなかに受け継がれたものと同じであるかのようだ」と。ツイザートは明らかに日本の宗教のありかたにヨーロッパ世界との共通性を見出し出している。しかしツイザートは言う。「いくら日本の偶像崇拜の聖職

者とキリスト教の聖職者に多くの点で共通項があるとしても、外面的な行為に気をとられすぎてはならない。重要なのは、心の内奥で何が意図され考えられているかであり、われわれキリスト教徒が何をどのような意図と考えをもって行うかである」と。このようにツイザートは、ヨーロッパのキリスト教徒の課題を示して本編を閉じる。⁽⁵⁴⁾

大道寺の創建

『日本誌』の後半部分に収録されたイエズス会士の通信文その他の翻訳資料(目次 A-G)は、すでに邦訳があるものが大半であり、ここでツイザートのドイツ語訳の内容を紹介するまでもない。しかし一つだけ、ツイザートによってヨーロッパのドイツ語圏に初めて紹介された「日本語文書」(D)に触れておきたい。⁽⁵⁵⁾漢字で書かれたこの文書は、周防・長門などを治める大名、大内義隆が山口市内の広大な土地を一五五二年に伴天連に与えたことを証明するもので、「大道寺創建裁可状」と呼ばれている(図2を参照)。ここでいう「大道寺」はキリスト教会のことである。当時はキリスト教会もまた「寺」と呼ばれていた。一方ツイザートは、通例は仏閣を *Tempel* (寺院) と表現しているが、ときによっては *Kirche* (教会) とも書いている。日本人もヨーロッパ人も、異国の宗教施設に自国の文化と言語に従った呼称を与えていたわけである。⁽⁵⁶⁾なお上述の「裁可状」の写しは、そもそも一五五七年のカスパル・ピレラ (Gaspar Viala) の書簡(ポルトガル語)に添付されたものであり、その書簡は一五七〇年に印刷、刊行されている。ヨーロッパの印刷本に漢字が掲載されたのはこれが初めてである。ドイツ語圏ではもちろんツイザートの『日本誌』が最初であった。⁽⁵⁷⁾これを見たヨーロッパ人(ルツェルン市民)は、その複雑さに驚き、東アジアの文化に好奇心を向けたに違いない。

図2：『日本誌』付録の「大道寺創建裁可状」（ドイツ語訳付き）
漢字の筆跡は1570年のガスパル・ビレラ書簡添付の同一資料（ポルトガル語訳付き）とは異なっており、おそらく漢字に通じていない書記が筆写したものと推測される。

276
Magſter eines
Sapponiſchen Briefs /
 ſampſt deß Lande eignen vnd ſel
 ganten Schickſalen.

Sſt zu wiſſen / das der Kö-
nig oder Herrzog zu Bungo inn Jappon
 ſtancus getandt/bertrachten Chriſtlichen Glaubens
 anzucommen / vnd beſſen zu Driband ein Kircken zu
 dem Catholischen Oberhöchſt gebawet / vñ den Lehr-
 hochigen Herten der Eoſteten. Jeſu jugendliche vnd vber-
 gehen hat. Zuſſ Japponiſch aber wende ein Kirck. Auf
 bogte gemacht / das ſie her zuſſ am vnnh jugend beß
 Primis. Demnach folge die beſſelben Admige Strechle
 Brief / darinnen er in guter Japponiſcher Sprach zu
 ewigen jahren ſchreibe vnd ordere / das dieſelbige nam-
 gebawete Kirck mit ſonderen Primigen / der
 obgenaidten Eoſteter geſchrafft vnd
 eingeleitete ſich.

Eolche Japponiſche Wort ſind auß der
Portugaliſchen vnd Latiniſchen / in vnterger
 meldeſamliche Sprach verbeindliche
 worden.

277

277
 Der Herrzog deß Reichs von
 Guro Rangai

國 華 國

deß Reichs deß Reichs Erbe deß Reichs
 Dungen / augercaqu / Juann /

徳 家 宗

deß Reichs deß Reichs hat verliſſen
 Dungen / Dichtig /

徳 家 宗

das

272
baeif/ben Roye/bae if/ben Prie
groffen/ jugang zum fern/
Jummei/

女道學

von Diber gang die ba form fuerlid
der Coie man find/ ren
na/

華英

das Befah/ jumachen Jällig/

華英

nach

273
nach/fern Willen biff an das Ende

無窮盡

der Will/ baftelortiff gefeg/

無窮盡

junctgeb/ Zimangurium der groffen
Statt/

無窮盡

mit

274
mit Freyheit das nimmerdarf möge
darinnen

自由

getödtet noch gesundt berfeßigen Zind bar
gen wozu Sittgen. mit es
den/ gen

自由

verfeßigt und meinen Nachkommen
verordnet gen

自由

gleich in dem Fremdschrift/Das Fremdsch

自由

275
genüget sein betrübe oder auß dieser
vertrübe

自由

Befreyung

自由

best ichs des Jans im ein und da Zils
in Ordnung für nütz
gen

自由

im

Am achten Monat am sechzigsten und achtzigsten

176

十月廿八日

Tag

心

Die Ueberschrift obgemeldetem Briefe angeordnet.

Der Herrzog

Satbiquibogai

周 倫 侯

Die Form des Königlichem Eigntums.

周 倫 侯

Kur

Kurze Relation und gewisser Bericht:

257

Welcher massen

vier prediker sind ein Brüd-

der der Sorietet Jesu/ sampt etlich andern/

weilichem Personen/ im Orientalischen Theil von dem

Anglanhigen / sind des Christlichen Glaubens

weget/ und getrahet / und gründlich gemar-

tert worden im Jahr 1583.

aus einem Schreiben des

Erwirdigen Herrn Alexander Balgahan/

Provincialis gewelder Sorietet dafelst / an seinem

Gericht/ den 28. Decembris nächst verwichen

Jahrs/ von Goa außgerhan/

gegeben.

Des J. Eypriani Spruch.

Der Marterer Blat ist der Kircken Gewas-

sen/ der sich nicht.

7

377

五、東西のカトリック改革

ヨーロッパの危機

ツイザートの『日本誌』は、彼自身が日本の伝統文化・伝統宗教の諸相を論じた部分と、日本のキリスト教会の動向を詳細に伝えるために翻訳した史料群から成っている。ツイザート自身の叙述部分の最後には、「日本の歴史をわれわれはどのように用いるべきか」と題する結びの節がもうけられている。ここでツイザートは、ヨーロッパ人自身の課題をより明確に示している。ヨーロッパ人は、かくも遠く離れた未知の国にまでキリスト教が伝えられたことを神に感謝すべきである。日本においてキリスト教に帰依する人々がいることは、人類の希望にほかならない。というのも「残念なことにわれわれのヨーロッパにおいては、救いをもたらす真実の信仰を棄てる者が無数にいるからである」。「それは「神の国の実り」を「あらゆる種類の異端と分派によって奪い去る多くの国民」の仕業である。「異端と分派 Ketzererey vnd Secten」とは、もちろん各種のプロテスタントのことである。「神の国の実りを奪い去る国民」とは、プロテスタントイイズムを信奉するドイツ人、スイス人、イギリス人などである。⁽⁵⁸⁾ツイザートの生きた時代のイスは、ツヴィングリとカルヴァンの宗教改革によって多くの邦 (Ort, Kanton) や共同支配地 (Gemeine Herrschaften) がプロテスタント化し、それによって新旧両宗派の混住が進み、改宗と亡命が日常化した世界であった。⁽⁵⁹⁾カトリック勢力とプロテスタント勢力は、それぞれ拠点とする邦の内側で何とか宗派的純粹性を保ち、聖職者と信徒の綱紀肅正を推進しようとしていた。「改革」はカトリック世界においても緊急の課題であった。ツイザートは、ロヨラとザビエルをはじめとするイエズス会士たちが日本の地でもたらした実りの大きさを賞賛しながら、語気を強めて次のように訴えている。「冷たくも熱くもない、なまぬるいものとして主の口から吐き出されてしまいう前に、わ

れわれの古いキリスト教とその礼拝に見られる日常的な忘恩と怠惰と不服従を正しく認識し、改革することを神は望んでおられるのではないか。実りのない木の根元にはすでに斧が置かれている。良い実を結ばない木は切り倒され、火の中に投げ入れられねばならない」と。⁶⁰ ツィザートの『日本誌』には危機意識がみなぎっている。

ルツェルンのカトリック改革

ツィザートは『日本誌』を書いたころ、新参のイエズス会士たちとともにルツェルンの教会改革・道徳改革に奔走していた。『日本誌』に描かれた日本人の迷信と悪徳は、あたかもヨーロッパ人の迷信と悪徳を映し出しているかのようである。以下、ツィザート自身が書記官として記録したルツェルンのカトリック改革、つまり迷信と悪徳との戦いの過程を追ってみよう。一五七七年五月一〇日、ツィザートは次のように記録している。イエズス会士の到来以来、蓄妾 (Concubinat) を罪とは思わず一般信徒以上に博打や飲酒などの軽率な行為に耽っていた聖職者の状態が改善されてきた。それは世俗当局が一五七六年に聖職者の蓄妾を禁止したからである。信徒たちの生活にも変化が見られる。彼らは教理問答を学んでいる。人々は遊興に費やす時間を減らし、礼拝に情熱を傾けている。修道院に入る者も増えた。プロテスタントの分派および邪教に陥った人々は改宗しはじめ、分派の教師や説教者たちさえカトリック教会にふたたび帰依するようになった。かつて一年に一回であったミサ聖祭は、今では主要な祝祭日ごとに行われるようになり、聖体 (consecrirtie Hostie) を拝領する資格のある市内の三〇〇〇人の信徒のうち一六〇〇人がそうした祝祭のさいのミサにあずかっている。市参事会も「公序良俗の維持 *erhaltung guter policey und ordnung*」にこつとめ、犯罪者たちはイエズス会士たちのもとで改悛の秘跡を受けている。かつてはお上 (Oberkeit) にも平民のあいだにも悪習や無秩序がはびこっていたが、パーテルたちが到来するやいなや、たとえば姦通 (*ebruch*) や不名誉な同様

(unerbare bystiz) が厳しく取り締まられ、酩酊、ダンス、賭博、夜の大騒ぎも禁じられ、謝肉祭、灰の水曜日、待降節の乱痴気もやめさせられた。娼婦も一掃された。「他の多くの問題についても、総じて適切な改革が行われた」³ summa in vlien andern stucken treffliche reformation angestellt」。カプチン会士たちの働きもあいまって、平民の苦情の多い高利や投機も抑制されるようになった。かつては多くの男たちが自分自身の妻や娘に「不義 eebrauch und Eury」を働かせて稼いでいたが、これも禁止された。かつては結婚によって結ばれた正式の夫婦のあいだでも、しばしば規律と名誉が保たれず、禁じられたいかがわしい商売 (Kuplery) や暴力 (Gewalt) ゆえに、不和や喧嘩が絶えなかった。今ではそうしたことはなくなっている。正式の婚姻を伴わない同棲は禁じられ、離婚は正当な理由を示して法的手続きをとらなければ認められなくなった (legitime per iustitiam)。この婚姻規則 (Ordnung des Hyratens) は、トリエント公会議の方針に従って (ut concilij Tridentini) 印刷、刊行されることになった。⁽⁶⁾

トリエント精神とキリシタンの道徳改革

イエズス会の宣教師たちは、トリエント公会議によって確立した新しい婚姻観をルツェルンのようなヨーロッパ都市だけでなく、遠くアジア世界にももたらしていた。もちろん日本も例外ではない。一六世紀末に刊行された日本語による公教要理『どちりなきりしたん』の「まぢりもうによ」(婚姻)の項には、次のように記されている。「一に「一たびえんをむすびてのちはなんによ」[男女]ともしりべつ「離別」する事かなはず。二にはよの人「他人」とまぢはる事かつてかなはざる事」。離別を認めないのは「もしりべつするの事心のままなるにをひては、おとこはをんなに心をへだて、をんなはおとこにこころをおき、ふうふの中すこしもやすき事なく」といった弊害が生じるからである。夫婦は生涯「たがひにそのふそくある所にちからをあはせ」ねばならない。夫婦のいずれかが姦通の罪を犯した場合

はもちろん離別が許される。しかし男であれ女であれ「りべつしてもよの人」に又よりあふ事はかなはず」。これが「まうちりもうによのやくそく」である。⁽⁶²⁾

伴天連たちの説く婚姻のサクラメントは、「娯楽と不規律」を愛する近世日本の男性たちの多くにとつて、受け入れがたい馬鹿げた教えであった。フロイスの記述によれば、十戒の第六戒「汝、姦淫するなかれ」は日本の武士たちの躰きであり、信長の長男（信忠）はこの掟を「緩和」するならキリシタンになつてもよいとたわむれに語つたといふ。⁽⁶³⁾ 女を奪つて妾を蓄えることを男子の誉れとする戦国の武士たちの放縱ゆえに、この時代には強姦・誘拐・暴力に苦しむ女性が無数にいた。そうした状況は、町人の世界にもみられた。フロイスによれば、堺のキリシタン商人、日比屋了慶（デイオゴ）の娘モニカは、父親の知己である奈良屋の息子に結婚を迫られ、断りつづけていたが、一五六六年、「名譽にかかわる」と憤激した宗札に誘拐され、監禁されてしまう。誘拐犯奈良屋宗札は、モニカの喉もとに何度も刀を突きつけた。キリシタンであるモニカには、「異教徒の遊び人」を夫にすることはできなかつた。やがて親戚衆の調停でモニカは解放される。しかし宗札の思いはおさまらなかつた。ついに彼は決心を固めて「自己改革」を試み、自らキリシタンになる。フロイスの記述によれば、宗札は「堺の娯楽と不規律とのなかで育てられたにもかかわらず」「大方の時間を教会で過ごし」「窮乏している人たちを喜んで自分の家に迎える」ほど熱心な信徒となり、ルカスという霊名を得た。モニカは生まれ変わったルカスを赦し、夫に迎えることになる。それは町中を騒がせた醜態の末に成立した婚姻であつたが、この「まうちりもうによのやくそく」は、モニカが病死するまで一点の染みもなく誠実に守られた。⁽⁶⁴⁾

イエズス会士たちは、ヨーロッパと新世界の両方で同時並行的に道徳改革を推進していた。日本で起こっていたことは、規模の問題を別にすれば、ルツェルンで起こっていたことと同じなのである。一五八六年、『日本誌』を出版

した年、ツイザートがルツェルンのカトリック改革の記録に書き入れた内容は次のようなものである。聖ステファヌスの日（二月二六日）の朝にだれもが瀉血（schrepfen und lassen）を行う迷信（superstition）は廃止された。また「悪魔払い、呪術師、祈禱師、占い師などに対して Exorcists, beschwerern, versetzen, warsagen und andern dergleichen」迷信的な行いが禁じられた。従わない者は取り調べを行って裁判にかけることになった。⁽⁶⁵⁾ 薬剤師の心得のあるツイザートは、ヨーロッパの呪術的医療や迷信的慣習を熟知しており、イエズス会士たちとともにそれらをつつとつ、しらみつぶしに葬り去っていたのである。

おわりに

近世のヨーロッパ人のなかには、日本の「偶像礼拝」を嘆きながらも、日本人をヨーロッパ人に勝るとも劣らない「理性的な白人」として描く人々がいた。一方、日本を「未開のインディアス」の一部と見なし、その住民に「非理性的な黒い野蛮人」のイメージを与えようとする人々もいた。これら二つの日本観は、その後数百年にわたって、欧米人の幾多の日本論・日本文化論のなかに、互いに絡み合いながら、陰に陽に、繰り返し出現することになる。その原像を創り出したのはマルコ・ポーロであり、一六世紀のイエズス会士たちも二つの極のあいだを揺れ動いていた。しかし、この時代に勝利をおさめたのは、ザビエルからオルガンティーンを経てヴァリニャーノにいたる宣教師たちの肯定的・共感的な日本観である。スイス人ツイザートも、この日本観の継承者であった。言うまでもなくツイザートは、日本の習俗は野蛮でヨーロッパの習俗は文明的だとは考えていなかった。ツイザートにとつては同時代のヨーロッパ人の生活も迷信と暴力と悪徳に染まっており、その浄化こそ最大の課題であった。ツイザートの描いた日本社会の暗部は、ヨーロッパ社会の暗部を写す鏡なのである。『日本誌』はヨーロッパ人のための建徳書であり、自己批

判・自己改革の書である。建徳書としての性格は、スペイン人やポルトガル人、オランダ人が書いた日本情報よりはるかに強い。それは当時のヨーロッパのドイツ語圏が、宗教改革との戦いすなわち「反宗教改革(Gegenreformation)」の最前線であったことと関係しているであろう。なお、ツイザートが名誉と礼節を尊ぶ日本人の気風、食生活、年中行事、芸術、建築文化に共感を覚えていたこと、つまり日本の事物それ自体に興味を覚えていたことは、あちこちの叙述から容易に読みとれる。その点でツイザートは日本学者(Japanologe)の草分けであったと言えよう。

レンヴァルト・ツイザートの息子ヨハン・バプティスト(Johann Baptist Cysat)は、父の感化を受けてイエズス会に入る。ザビエルの生涯と思想に共鳴していたヨハン・バプティストは、イエズス会総長にたびたび中国布教への派遣を願い出た。しかしこの夢は叶わなかった。ドイツ語圏のイエズス会士がアジアに派遣されることはほとんどなかったからである。かつてザビエルは、日本の寒い地方に向いているのはフランドル人かドイツ人であると考え、しばしば上長にそのような内容の手紙を書いたが、彼のアイディアは日本布教をほぼ独占していたポルトガルやスペインのイエズス会士たちには受け入れられなかった。⁽⁶⁶⁾ けつきよくヨハン・バプティストは学究の道を歩むことになる。一六一八年に彼はインゴルシュタット大学の教授になり、数学とヘブライ語を教える。そして一六二三年、彼は故郷ルツェルンに帰り、栄えあるイエズス会神学院の院長に就任した。⁽⁶⁷⁾ ヨハン・バプティストの時代、すなわちバロック時代のイエズス会には教化活動の一環として聖史劇を上演する習慣があり、スイスでは聖マウリティウス、聖レオデガル、聖フリドリッヒ、修士クラウスといった聖人や修道者の物語が力強く演じられていた。こうした演劇は観衆の心にカトリシズムへの愛情を燃え立たせた。やがてこの舞台には「日本人」も登場することになる。その役を演じたのはルツェルンの神学生たちであった。その題は『日本の殉教者の勝利[*Triumphus Japoniorum martyrum*]』といひ、初

演は一六三八年である。レンヴァルト・ツイザートは『日本誌』を通じて、つまり活字によってルツェルン市民に日本情報を与えたが、ツイザートの遺志を継ぐ青年たちは、演劇をつうじて、つまり肉声と身体的表現によって同じことをしたのである。⁽⁶⁸⁾

注

- (1) マルコ・ポーロ『東方見聞録2』愛宕松男訳(平凡社、一九七一年)、一三〇、一三九、一四〇ページ。
- (2) 『東方見聞録』をドイツ語圏の人々が初めて翻訳で手にしたのは一四七七年のことである。したがってそれは一六世紀初頭までは「新しい情報」であった。Vgl. Peter Kapiza, Japan in Europa. Texte und Bilddokumente zur europäischen Japankenntnis von Marco Polo bis Wilhelm von Humboldt, Bd. 1, München 1990 [以下、Kapiza, Japan in Europaと略す], S. 45.
- (3) ケンベル『江戸参府旅行日記』全二巻、斎藤信訳(平凡社、一九七七年)を参照。
- (4) デ・サンテ『天正遣欧使節記』泉井久之助他訳(雄松堂書店、一九六九年)所収の図(写真版)を参照。なお少年使節はイエズス会巡察師アレシヤンドロ・ヴァリニャーノ(Alejandro Valignano, 1539-1606)の立案によるもので、日本伝道の成果をヨーロッパ人に知らしめ、また日本人にヨーロッパの偉大さを体験させるための企画であった。テ・サンテ前掲書、訳者解説、七二三ページ以下を参照。
- (5) Warhafter Bericht/ Von den Newerfundnen Japponischen Inseln und Königreichen/ auch von andren zuvor vnbekandten Indianischen Landen. Darin der heilig Christlich Glaub wurdertlich zunimpt vnd aufwaechst Neben dem allen erfindet sich in dieser Edition grundliche anzeigung von der Japponischen Legation newlich gehn Rom ankommen: von etlichen Blutzengen deß wahren Christlichen Glaubens: von Brasilia/ vnd weytere beschreibung der Landschafften vnd Wesen der Newerfundnen Voelcken/ sampt andern seltzamen Geschichten/ so in dem folgenden Inhalt deß ganzen Buochs mit kurzem geweldet werden. Durch RENWARDUM CYSATUM. Burger zu Luzern auß dem Italianischen in das Teutsch gebracht/ vnd jetzt zum erstmal im Truck außgangen. Getruckt zu Freyburg in der Eidgenosschafft bey Abraham Gemperlin/ 1586. 以下Cysat, Berichtと略す。この『日本誌』は一五九二年に再版されたが、そのこのタイトルはCosmographische und warhaffte Beschreibung/ der newerfundnen Orientalischen/ Japponischen Königreichen/ Landschafften/ Inseln und Stätten/ sampt andern bißher unbekante Indianische Länder... Freyburg/ Schweiz 1592に改題。Vgl. Kapiza, Japan in Europa, S. 175. なおレンヴァルトはRenwardと記されたことがあつた。

- (6) フォルヘル・デ・コスタ (Manuel da Costa) の「オリエンスと通信文書集 (Historia dos missiones do Oriente até o anno de 1568)」が「一五七一
年」に「ヨハン・ニコロ・マンノイ (Giovanni Pietro Maffei) の手記」に「ドイツ語に訳された」が、ドイツ語に重訳されて「一五八六
年」に「ニコロ・マッセル」に「転写」された。 (Kurze Verzeichnuß und historische Beschreibung deren dingen / so von der Societet Jesu in Orient/
von dem Jar nach Christi Geburt/ 1542. bis auff das 1568. gehandelt worden...ins Teutsch gebracht...durch...Joannem Gregorium Götzen, Ingol-
stadt 1586.) 「ヨハン・キーター」の「資料」は「言及」して「なご」。「また出版」されて「なご」たか。「あつた」は「入手」して「なご」たか。「と思」われ
る。
Vgl. Kapitza, Japan in Europa, S. 124f., 177f.
- (7) ショーケールの「辞書」は「Historisch-Biographisches Lexikon der Schweiz, hg. mit der Empfehlung der Allgemeinen Geschichts-
forschenden Gesellschaft der Schweiz unter der Leitung von Heinrich Turler, Bd. II, Neuenburg 1924, S. 658-664」に「註」して「Basilius Hilder-
brandt Cysat, der Stadtschreiber zu Luzern. Lebensbild eines katholisch-schweizerischen Staatsmannes aus dem 16. Jahrhundert, in: ASG
13 (1862), S. 161-224; 20 (1875), S. 1-88.
- (8) Sebastian Gruter, Geschichte des Kantons Luzern im 16. und 17. Jahrhundert, Luzern 1945, S. 227f; Joseph Studhalter, Die Jesuiten in Luzern,
Stans 1973, S. 56f., 83, 254f.; 近世のルンデルンについては拙著『改革と亡命の社会史——近世スイスにおける国家・共同体・個人』(創文社
二〇〇三年)「第四章の「改革」の第五章を参照。
- (9) Studhalter, a. a. O., S. 109, 200-227.
- (10) Johannes Beckmann, Der erste Japandruck in der Schweiz, in: Schweizerisches Gutenbergmuseum: Zeitschrift für Buchdruck- und Pressege-
schichte, Bibliophilie und Bibliothekswesen 25. Jg./Heft. 3 (1939), S. 149-157 [以下「Beckmann, Der erste Japandruck」に略す]; Thomas Immoos
und Hans Breitenstein, Japans Bild von der Schweiz, in: Schweiz/Japan. Beiträge zu ihren Beziehungen, hg. v. der Schweizerisch-japanischen Gesell-
schaft anlässlich ihres zwanzigjährigen Bestehens, Zürich 1975, S. 13; Martin Hürlimann, Der Beitrag schweizerischer Autoren und Verleger zur
Kenntnis Japans. Eine Bibliographie, in: Ebd., S. 63.
- (11) Cysat, Bericht, Vorrede, S. ii, iiij.
- (12) Cysat, Bericht, Vorrede, S. iiij, iiij.
- (13) Cysat, Bericht, Vorrede, S. iiij.
- (14) Cysat, Bericht, Vorrede, S. vii.
- (15) Cysat, Bericht, Von der Insul Japon oder Jappan vnd ihrer gelaenheit S. 1-3. 世界を三部分に分り本朝(日本)・震旦(中国)・天竺(イン
ド)に分ける「三國世界観」については川村博忠『近世日本の世界像』(ベリかん社、二〇〇三年)「一五」ページ以下を見よ。「一六世紀のイエズス

- ス会士による「三国世界観」への言及としてはジョアン・ロドリゲス『日本教会史』下巻（岩波書店、一九七〇年）、一八五ページを参照。
- (16) Cysat Bericht, Von der Insul Jappon oder Jappon vnd Jherer gelehtheit, S. 4. なおツイザートは「公方様」(室町將軍)を「名目的な皇帝」と見なし、天皇には触れていない。しかしその当時イエズス会士はすでに日本の権力関係について正しく把握しており、たとえばルイス・フロイスは一五八二年に「公方様 Chocama」は全日本の王である「内裏 Davi」(天皇)に次ぐ第二人者であると述べている。村上直次郎訳「イエズス会日本年報」上巻(雄松堂書店、一九六九年)、二〇五ページ。他方ヴァリニャーノは「日本諸事要録」(二五八三年)において、「内裏」と「公方」の関係、「公方」に対する「屋形」(地方の領主)たちの反逆について詳しく説明している。ヴァリニャーノ『日本巡察記』松田毅一他訳(平凡社、一九七三年)、八、九ページ。
- (17) Cysat Bericht, Von der Insul Jappon oder Jappon vnd Jherer gelehtheit, S. 4. 5. 一五六〇年付のゴンサロ・フェルナンデスの書簡には「この地はポルトガルにあると同じ食糧を有すれどもその額少し、彼らは労働せず、飢餓する者甚だ多し、この地は甚だ寒し」とある。一方、翌年のコスメ・デ・トルレスの書簡には「日本の島はイスパニアと同じ緯度に在り、気候もまた同一」「土地甚だ肥え、一年二回穀類を産す」「彼らの間には戦争多く、これがため死する者また多し」とある。村上直次郎訳「イエズス会士日本通信」上巻(雄松堂書店、一九六八年)、二〇〇、二二四ページを参照。
- (18) Cysat Bericht, Von Gestalt der Kleydung vnd Nahrung der Inwohner, S. 5-10. 日本人の頭髮についてはフロイスが一五六五年に詳しく報告している。フロイス『日欧文化比較』岡田章雄訳(岩波書店、一九六五年)、五〇三ページ。日本人は粗食ゆえに健康に恵まれて長生きだとか酒に弱いといった報告はザビエルが最初にもたらしたものである。河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』(平凡社、一九八五年)、四八八ページ参照(一五四九年の書簡)。
- (19) Cysat Bericht, Von Gestalt der Kleydung vnd Nahrung der Inwohner, S. 10f.
- (20) Cysat Bericht, Von Gestalt der Kleydung vnd Nahrung der Inwohner, S. 12-17.
- (21) 前掲、『ザビエル全書簡』四七一、四七二、四九二、五一五、五二二、五二六、五三三、五四一ページおよび前掲、『イエズス会士日本通信』上巻、二二二四ページを参照。
- (22) Cysat Bericht, Von Gestalt der Kleydung vnd Nahrung der Inwohner, S. 18f. 日本の身分制度についてはガスバル・ピレラの報告が土台になつてゐると思われる。前掲、『イエズス会士日本通信』上巻、一三五ページを参照。なおピレラは「武士 Fudagos」「坊主」「農民と商人」と区分してゐる。
- (23) Cysat Bericht, Von Gestalt der Kleydung vnd Nahrung der Inwohner, S. 19-22. ツィザートは茶の湯に関心があつたらしく、その記述は非常に長い。ヨーロッパ人に日本の茶の湯のことを初めて詳しく伝えたのはルイス・フロイスである。フロイス『日本史 3』(中央公論社、一九七

- 八年、二六八—二七二ページを見よ。前掲、ヴァリニャーノ『日本巡察記』、二二—二五ページにも詳しい。
- (24) Cysat, Bericht, Von Gestalt der Kleidung und Nahrung der Inwohner, S. 22f. 蝦夷地とアイヌのことをもっと早くヨーロッパに伝えたのはフロイスであり、ツイザートの記述もこれに従っているようにある。H・v・シーボルト『小シーボルト蝦夷見聞記』(平凡社、一九九六年)、二二—八〇、八一ページを参照。
- (25) Cysat, Bericht, Von Verwaltung und Ordnung des Japponischen Regiments, S. 23—26. 三重の統治に関するツイザートの記述は、明らかにトルレスに依拠している。前掲、『イエズス会士日本通信』上巻、二二四—二二七ページ参照。なおトルレスは宗教界の最高指導者を座主(Zac)と呼んでいる。「ジンド Jundo」の語源は不明で『日葡辞書』にも載っていないが、現代ポルトガル語の辞典には「アフリカの異教の祭司の長」および「日本の学校の教師 (doutor) の一種」と書かれている。Dicionario da Lingua Portuguesa, Lisboa 1987, p. 999.
- (26) Cysat, Bericht, Von Verwaltung und Ordnung des Japponischen Regiments, S. 26—31. 「王Vo」は天皇、「最高裁判官」はすでに言及されている公方様(将軍)であろうが、政治体制に関するツイザートの説明は整理不十分である。もちろんその原因は当時の日本の不安定な政治状況とイエズス会士の日本通信の混乱にある。
- (27) 田中俊之「名譽の喪失と回復——中世後期ドイツ都市の手工業者の場合」前川和也編著『コミュニケーションの社会史』(ミネルヴァ書房、二〇〇一年)、四〇九—四三三ページ参照。貴族・市民・農民それぞれの「名譽」観については F. Zunkel, Ehre, Reputation, in: Geschichtliche Grundbegriffe, Bd. 2, hg. v. O. Brunner et al., Stuttgart 1975, S. 1—63 を見よ。
- (28) 前掲、『ザビエル全書簡』、四四七、五四三ページ、『イエズス会士日本通信』上巻、二〇〇ページ、ヴァリニャーノ『日本巡察記』、四六ページ、同書の解題Ⅱ、二九四ページ。折井善果「アレックスサンドロ・ヴァリニャーノ『日本巡察記』」、岡本さとこ編『アジアの比較文化——名著解題』(科学書院、二〇〇三年)、一九九—二〇一も参照。
- (29) 前掲、『ザビエル全書簡』、五四三、五四四ページ。
- (30) 前掲、『ザビエル全書簡』、五三三、五三四ページ。
- (31) 内山昶「青い目に映った日本人——戦国・江戸期の日仏文化情報史」(人文書院、一九九八年)、二五—二九ページを参照。
- (32) 前掲、『ザビエル全書簡』、二二七ページ。
- (33) 前掲、ヴァリニャーノ『日本巡察記』解題Ⅱ、三二二、三二四ページから引用。
- (34) 小シーボルト『蝦夷見聞記』(平凡社、一九九六年)、八〇、八一ページを参照。
- (35) 宣教師たちは「文化」の伝達に欠かせない「文字」を知らない種族を明らかに蔑視していた。高瀬宏一郎『キリシタンの世紀——ザビエル渡日から『鎖国』まで』(岩波書店、一九九三年)、四五ページを参照。

- (36) 前掲、『日本巡察記』 解題Ⅱ、三〇三、三〇四ページから引用。同書の九四ページも見よ。若桑みどり「クアトロ・レガッツィー——天正少年使節と世界帝国」(集英社、二〇〇三年)、三〇五、三〇六ページ参照。
- (37) 前掲、若桑「クアトロ・レガッツィー」、三〇五、三〇六ページを参照。
- (38) 前掲、内山「青い目に映った日本人」、二七ページ。
- (39) 林屋永吉訳「コロンブス航海誌」(岩波書店、一九七七年)、三八、八六、一三七、一四五、一六八ページ。なおこのときコロンブスは、すぐ近くにあるはずの「ジバング」の発見をまだ諦めてはいなかった。同上、六二、一六八ページ。
- (40) インディオを「非人間」と見なす航海記や征服記についてはラス・カサス『インディアス破壊を弾劾する簡略なる陳述』(石原保徳訳(現代企画室、一九八七年)、巻末の解説Ⅰ、Ⅱを見よ)。
- (41) 前掲、『ザビエル全書簡』、六一七、六一八ページを見よ。ヴァリニャーノの書簡の引用は同書の六二〇ページの注(六)による。なお引用文中の「」は筆者の挿入(以下同じ要領で行う)。
- (42) 前掲、デ・サンデ『天正遣欧使節記』、七五、六八六、六八七ページ。
- (43) イエズス会士たちの人種論については前掲、高瀬「キリシタンの世紀」、第四章も参照。
- (44) 杉浦明平「切支丹・蘭学集」(筑摩書房、一九七〇年)、一七七ページ。
- (45) Cysat, Bericht. Von der Heydnischen Geistlichkeit/ Klosterstand/ Vnglauben und falschem Gottesdienst der Japponier. S. 31-35. 『ザビエル全書簡』、五二二ページ以下、「イエズス会士日本通信」上巻、二二七、二二八ページを参照。
- (46) Cysat, Bericht. Von der Heydnischen Geistlichkeit/ Klosterstand/ Vnglauben und falschem Gottesdienst der Japponier. S. 35-39. 『ザビエル全書簡』、五二二ページ参照。大日如来に関するツイザートの説明はトルレスの報告によると思われる。Darchéはツイザートの誤記ないし誤植であらう。なおトルレスは大日をデニシ(Denis)と綴っている。「イエズス会士日本通信」上巻、二二七、二二八ページを見よ。
- (47) Cysat, Bericht. Von der Heydnischen Geistlichkeit/ Klosterstand/ Vnglauben und falschem Gottesdienst der Japponier. S. 40-43. 日本の坊主(Bonzo)の生活の腐敗についてはザビエルが詳しく述べている。『ザビエル全書簡』、四七二ページ以下を参照。なお坊主(ボンズ)という日本語はザビエルが初めてヨーロッパにもたらしたものである。女性形はボンザ(Bonza)である。ツイザートは「僧侶と尼僧」を Bonzen und Bonzinen と綴っている。Ebd., S. 96.
- (48) Cysat, Bericht. Von der Heydnischen Geistlichkeit/ Klosterstand/ Vnglauben und falschem Gottesdienst der Japponier. S. 43-47. 弘法大師および弥勒信仰のことはバルタサル・ガロ(Barthasar Gago)が二五六一年に報告している。前掲、『イエズス会士日本通信』上巻、二九八、二九九ページ。なおガロは弥勒を Mirocu と綴っているが、ツイザートは誤って Mirozu としている。弘法大師はガロ書簡では Conbodaixi

- である。ちなみにフロイスの書簡では Combodaxi となっている。「イエズス会士日本年報」上巻、二八二ページ以下。
- (49) Cysat, Bericht, Von der Heydnischen Geistlichkeit/ Klosterstand/ Vnglauben und falschem Gottdienst der Japponier. S. 48-55, 57f. このあとツイザートは悪魔および悪魔に仕える妖術師たち (Zauberer) が人間に及ぼすわざわいについて詳述している。Ebd., S. 58-66. なお法華宗、一向宗についてはトルレスが、山伏についてはガスバル・ピレラが短く報告している (一五五一年および五七年)。前掲、「イエズス会士日本年報」上巻、二二二、二二三、二三四ページを見よ。一五八三年にはフロイスが雲仙岳の山伏について詳細な報告を書いている。前掲、「イエズス会士日本年報」上巻、二七七ページ以下。フロイスは山伏を「武士」と考えて「山の戦士 Soldados da serrá」と説明している。ツイザートがこれをドイツ語に移すさいに「谷の戦士」としたのは、戦いに長けたスイスの渓谷の民を連想したからであろうか。なお「前鬼」はフロイスの場合は Jenguis とつづらられている (同上、二七八ページ)。「前鬼」「後鬼」は行者に従う従者であるが、当時は大峯の山中に彼らの集落があったという。根井浄「修験道とキリシタン」(東京堂出版、一九八八年)、二二六、二二七ページを参照。
- (50) Cysat, Bericht, Von der Heydnischen Geistlichkeit/ Klosterstand/ Vnglauben und falschem Gottdienst der Japponier. S. 66-79. 孟蘭盆については一五五七年にガスバル・ピレラが簡潔に報告している。「イエズス会士日本通信」上巻、二二二ページ。
- (51) Cysat, Bericht, Von den Heydnischen Gebet und Andacht der Japponier. S. 80-82. Von den Predigen der Heydnischen Pfaffen und Bonzen. S. 83-85. フロイス「日本史」(一五〇一-二五二ページ)参照。
- (52) Cysat, Bericht, Von sonderen vnd firmen Abbtischen Kirchen/ vnd andern Gebäuden in Jappone. S. 86-95. 一五六〇年築城の奈良の城は永松氏の多聞城であらう。これについてはルイス・マ・アルメイダ (Luís de Almeida) が「日本で最良最美の城」として紹介している。フロイス「日本史」(一八〇ページ以下)を見よ。「タマリ」は坊泊港で、その近く城は島津氏の鶴丸城である。これについては「イエズス会士日本通信」上巻、二七三ページ以下を参照。
- (53) Cysat, Bericht, Von sonderen vnd firmen Abbtischen Kirchen/ vnd andern Gebäuden in Jappone. S. 95-101. 都については「ザビエル全書簡」(四九二ページおよびフロイス「日本史」(一六八ページ以下)を参照)。
- (54) Cysat, Bericht, Von sonderen vnd firmen Abbtischen Kirchen/ vnd andern Gebäuden in Jappone. S. 106f.
- (55) Cysat, Bericht, Abschrift eines Japponischen Briefs/ sampt deß eigen vnd seltsamen Buchstaben. S. 270-276.
- (56) Ebd., S. 86.
- (57) 「イエズス会士日本通信」上巻、一四二-一四四ページ。Vgl. Kapitza, Japan in Europa, S. 102, 176.
- (58) Cysat, Bericht, Beschluß wie sich jederman diser Japponischen Histori gebrauchen soll. S. 1f.
- (59) 前掲「拙著『改宗と亡命の社会史』」第一章を参照。

- (65) Cysat, Bericht, Beschluß wie sich jederman diser Jappomischen Histori gebrauchen soll, S. 4: „Wolte Gott aber im Himmel/ das wir solche Bekehrung der Heyden vnd wunderbarliche schickung zu Herzen führten/ auch darauß unsere tägliche vdanckbarkeit/ faulkeit vnd vnghehorsamb in dem alten Christlichen Wesen vnd Gottesdienst recht erkänden und reformierten/ ehe das wir als die Lauwen/ welche weder kalt noch warm sein/ aus dem Mund des Herrn billich aufgespeyt werden. Dann warlich die Art ist schon den vnfruchtbaren Bäumen an die Wurzel gesetzt/ dz welche Baum nit gute Früchte bringen/ abgehawen/ vnd ins Feuer geworffen werden müssen.“
- (66) Renwart Cysat Collectanea D. fol. 356b-360b: De rebus collegij soc. Jesu et Republicae Lucernensis. Gottes Werk soll man nit verschwygen, in: Archiv für schweizerische Reformationsgeschichte, hg. v. der Schweizerischen Gesellschaft für Wissenschaft und Kunst, Bd. II (1904) [Cysat, Collectanea v. 4^{te}], S. 5-13, 22. Vgl. Therese Brugisser, Frömmigkeitspraktiken der einfachen Leute in Katholizismus und Reformiertentum, Beobachtungen des Luzerner Stadtschreibers Renward Cysat (1545-1614), in: Zeitschrift für Historische Forschung 17 (1990), S. 1-26.
- (67) 新村出他校注『切支丹文学集』(平凡社、一九九三年)一七三—一七九ページ。
- (68) フロイス『日本史5』(中央公論社、一九七八年)、二二六—二七ページ参照。
- (69) フロイス『日本史4』(平凡社、一九七〇年)、六一—六八ページ。若桑『クアトロ・レガッツィ』一四九ページも参照。
- (70) Cysat, Collectanea, S. 29.
- (71) 『ザビエル全書簡』、六一—九ページおよび『イエズス会士日本通信』上巻、一九ページを参照。
- (72) Vgl. Joseph Studhalter, Die Jesuiten in Luzern, Stans 1973, S. 254-265.
- (73) Studhalter, a. O., S. 455f. 同年にルツェルンで刊行された同テーマの印刷物として『悲劇／クリスティアノマキア・ヤボネンシス／一六二八年、一六二九年、一六三〇年に日本のキリスト教徒になされた恐ろしい迫害と流血 Christianomachia Japonensis, das ist Erschrockliche Verfolgung und Blutbat, welches 1628, 1629 und 1630 in Japan wider die Christen angerichtet worden. Tragödie』を参照。Vgl. Martin Hürimann, a. a. O., S. 63.

(二〇〇四年一月十三日 受理)